

2017年8月1日

# みずほディーラーズアイ (2017年8月号)

みずほ銀行

## 目次

米ドル相場	2	韓国ウォン相場	9
ユーロ相場	4	台湾ドル相場	10
英ポンド相場	6	香港ドル相場	11
豪ドル相場	7	中国人民元相場	12
カナダドル相場	8	シンガポールドル相場	13
		タイバーツ相場	14
		マレーシアリング相場	15
		インドネシアルピア相場	16
		フィリピンペソ相場	17
		インドルピー相場	18

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。

# 米ドル相場

予想レンジ: USD/JPY 108.00 ~ 116.00

国際為替部 為替営業第二チーム 下山 泰典

## 先月の為替相場

今月のドル/円相場は上に往って来いとなるも、結局は110-115円のレンジで推移。

月初3日、週末の東京都議会選挙での自民党大敗を受けてドル/円は111.90円をつけた。その後は中国6月製造業PMIの予想を上回る結果や良好な米6月ISM製造業景況指数を受け113円台前半まで値を上げた。翌4日は、北朝鮮が大陸間弾道ミサイルを発射したとの報道を受けて一時112円台後半まで急落するも、最終的には値を戻した。その後は112-113円台で揉み合っていたが、7日に日銀が指値オペを通告したことで113円台後半まで急伸し、さらに米6月雇用統計で雇用の強い伸びが確認されると114円台前半まで値を上げた。

10日の週では、11日にウィリアムズ・サンフランシスコ連銀総裁が「バランスシート縮小の早期着手を予想」と発言したことや、底堅い米長期債利回りや株価、堅調なクロス円の動きにサポートされ今月の高値となる114.49円まで上昇。しかし、トランプ米大統領の長男が選挙期間中にロシア政府の弁護士と面会したと報じられると反落。12日も上値が重い展開となる中、注目されたイエレンFRB議長の議会証言では物価の先行きに対する不透明感に言及した部分がハト派寄りと解釈され113円を割り込む展開に。14日は注目の米6月消費者物価指数や同小売売上高が市場予想を下回り一時112円台前半まで下落した。

17日の週では、18日に医療保険制度改革(オバマケア)代替法案の可決が困難との見方が拡がり、また19日には米金利低下やクロス円を売る動きが強まったことで111円台半ばまで値を下げた。20日は日銀展望レポートでの物価見通しの下方修正および物価目標の達成時期が「2019年度頃」に先送りされるも反応は限定的。その後、モラー特別検察官がトランプ米大統領のビジネスに関する取引も捜査対象に加えると報じられると、一時111円台半ばまで急落した。さらに、21日にはスパイサー米大統領報道官の辞任が報じられると111円近辺まで下落した。

24日の週は、25日に米上院がオバマケア廃止へ向けた動議を可決し翌日にかけて112円台まで上伸したが、26日のFOMC声明文で物価情勢の現状認識が下方修正され、また28日には市場予想を下回った4~6月期GDPや北朝鮮の大陸間弾道ミサイル発射などにより、31日には今月の安値となる110.21円まで下落し、110円台前半で越月した。

## 今月の見通し

今月のドル/円相場は、110-115円を中心とするレンジ内で推移する展開を予想する。

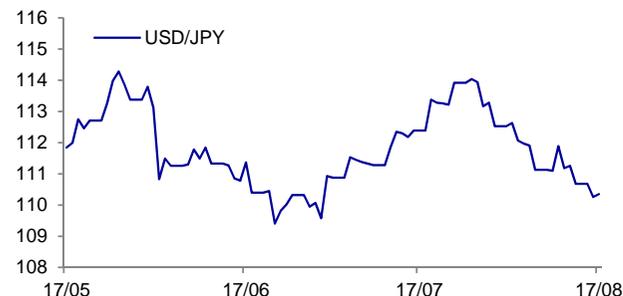
金融政策、日米政局、地政学的リスクなど、足許の相場は材料には事欠かないが、それぞれに場当たりの振らされ右往左往している感は否めない。かかる中で今月の見通しを考える上では、最も安定的に評価できるだろう金融政策を軸に置きたい。金融政策面では、海外の主要中銀と日銀とのスタンスの違いは顕著。FRBやカナダ銀行(中央銀行、BOC)は利上げをしており、ECBやイングランド銀行(中央銀行、BOE)も正常化を模索している一方、日銀は物価目標達成時期を延期している。かかる状況下では、ドルだけでなく主要他通貨への資金流入が見込まれる一方、そのファンディング通貨として円が採用され、円売り・他通貨買いが投機筋のベースの取引になるのではないかと。米国では9月にもB/S縮小のアナウンスが見込まれており、今月上旬の米6月PCEコアデフレーターや6月雇用統計、今月下旬に予定される米ジャクソンホールでのイエレンFRB議長の講演等が材料視されそう。今後米景気が減速する可能性も意識される中、今B/Sの縮小をしなければ次のチャンスは数年後ともなりうるため、FRBとしてはB/S縮小を断行すべく、基本的にはタカ派のトーンを崩すことはないと思われる。ドルインデックスは6月・7月と下げ足を早めたが、テクニカル的にも押し目買いが入っても不思議はなく、また他の通貨に対しても円が売られるとすれば、ドル/円は基本的に底堅く推移すると考えている。

しかしながら、リスク要因も少なくはない。まずは日米の政局。米国ではロシアゲート疑惑、オバマケア代替法案の行方、債務上限問題への対処などトランプ政権の手腕が問われる問題が山積している。政府高官の辞任も相次ぐ中、政権への信任が一段と揺らぐ事態となればドル売りは不可避だろう。また、本邦の安倍政権の支持率低下も著しい。今月は内閣改造が行われる予定であり一旦は持ち直すことも考えられるが、仮に政権が一段と揺らぐことになれば、リスクオフの流れから買いになりそう。加えて、北朝鮮のミサイル問題など地政学的リスクもあり、市場には警戒感が漂い続け、ドル/円が一方方向に上昇する展開は考えづらく、急速に下げ足を速める可能性もある。

以上を勘案し、金融政策面から基本的には110-115円での底堅い展開をメインに考えたいが、リスク要因が顕在化した際に大きく下落する展開には注意して臨みたい。

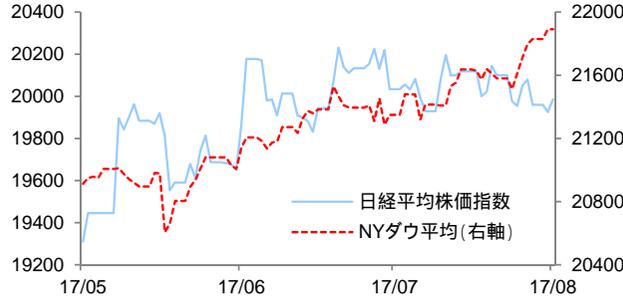
## 為替の動き

(資料) ブルームバーグ



## 株価指数の動き

(資料) ブルームバーグ



## 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/2	東京都議会議員選挙	-	-	-	-
7/3	米 ISM製造業景況指数	6月	55.3	57.8	54.9
7/7	日銀 指し値オペ実施	-	-	-	-
7/7	米 非農業部門雇用者数変化	6月	178K%	222K	152K
7/12	イエレンFRB議長議会証言	-	-	-	-
7/14	米 小売売上高速報(前月比)	6月	0.1%	-0.2%	-0.1%
7/26	FOMC 金融政策公表	-	-	-	-
7/28	米 GDP(1次速報、前期比/年率)	2Q	2.7%	2.6%	1.2%

## カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

### ドル・ブル (5名、108.00~116.00、中心109.00~115.00)

加藤	109.00 ~ 115.00	タカのなかで1羽だけハトであることはやはり軽視できない。なかなかヘッジ外しに踏み切れていない投資家も110円を目処に動いてくる可能性が高いと見る。
高田	109.00 ~ 115.00	日銀の緩和姿勢が鮮明となる状況下、米金融引締めの手掛りとなる経済指標や要人発言を背景にドルがサポートされる展開を予想する。一部弱気な発言も見られたが未だFRBはタカ派姿勢を崩していない。良好な経済指標が確認されれば日米金利差拡大が意識されドルは底堅く推移するのではないかと。
佐藤	109.00 ~ 114.00	インフレ率が低位安定推移する中では、利上げ期待は盛り上がりにくいものの、FRBによる資産縮小開始が視野に入中、ドルは底堅い展開を予想する。ジャクソンホール講演が開催される下旬に向けて徐々に下値を切り上げる展開を予想したい。
下山	108.00 ~ 116.00	主要中銀の中でのBOJの金融政策のトーンの違いは顕著。日米の政治リスクや地政学的リスク等はくすぶり続けようが、現実には限られた金融政策を受けたトレードが優勢となろう。ドル/円・クロス円ともに上昇する展開を予想する。
西谷	109.50 ~ 112.50	今月は特段目立った材料もなく、9月以降に重要イベントが集中していることを踏まえるとレンジ推移が基本線。109円台半ば~112円台半ばを中心レンジに据えており、足許の水準を勘案すると、下値余地は限定的と考えている。

### ドル・ベア (7名、106.00~113.00、中心108.00~113.00)

田内	108.00 ~ 113.00	トランプ米政権内部の不安定さに加え、本邦サイドでも安倍内閣支持率が低位に推移する中での内閣改造は支持率回復・反転上昇に転じるまでには至らないとみる。一段低下の際には今後日銀による異次元緩和策の変更も視野に入る可能性もあり、ドル/円の上値は限定的と考える。
山下	106.00 ~ 111.00	中国の対北朝鮮対応に痺れを切らした米国が、為替問題で中国を攻撃してくれば、唯一ドル安が進んでいない円に対しても、風当たりは強くなりそう。FOMC利上げもインフレ指標を暫くは見極めたいところであり、ドル/円はダウンサイドリスクが高まるであろう。
矢野	108.00 ~ 113.00	トランプ政権に対する不透明感の高まりなどもあり、9月のテーパリング観測は高まるものの、インフレ鈍化等から追加利上げに対する期待感徐々に後退しつつある。今月も足許のドル安が継続し、上値の重い地合いを予想。
岡本	108.00 ~ 113.00	米国のインフレ率が高まっておらず、FRBも利上げには慎重なスタンスを見せている中、引続きドル高を連想し辛い状況。ある程度ドル安は進行しているが、重石となっている外部環境に大きな改善が見られておらず、ドル/円は上値の重い展開が継続すると予想。
森谷	107.00 ~ 113.00	インフレ指標をはじめとする米国経済指標への警戒感が拭いきれない状況が続いている。第1Qの指標の下振れが「一時的」であったと判断するまでにはもう少し時間がかかりそう。米国政治の先行き不透明感も相俟ってドルが買われづらい地合いが継続すると予想する。
鶴田	108.00 ~ 112.50	足許で低調なインフレ指標が続く中、第2四半期GDPも第1四半期から回復はしているものの、力強さはなくやや物足りなさを感じる。米議会休会入り前のヘルスケア法案の上院通過も絶望視される中でドルが積極的に買われる展開は考えづらく、引き続き上値の重い展開を予想する。
大熊	107.00 ~ 112.00	米上院で医療保険制度改革法の一部を廃止する法案が否決された他、大統領首席補佐官が更迭される等、トランプ大統領の政権運営は混沌としており、経済政策の実現は困難との見方が広がっている。インフレ関連の指標は軟調で、利上げペース鈍化への懸念も強く、ドル買い基調にはなりにくいとする。

## ユーロ相場

予想レンジ: EUR/USD 1.1500 ~ 1.2000  
EUR/JPY 127.00 ~ 132.00

国際為替部 為替営業第二チーム 田内 清貴

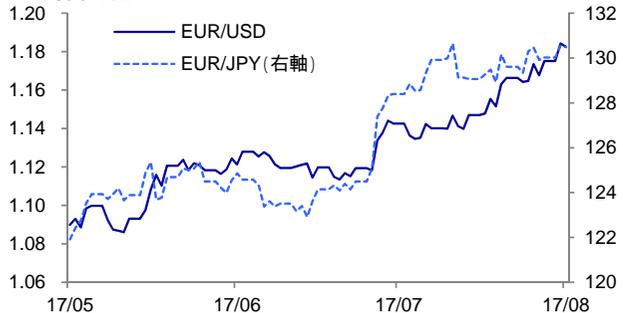
### 先月の為替相場

7月のユーロ相場は前月の流れを受け継ぎ堅調に推移し、月末にかけてはECB政策理事会後のドラギECB総裁の記者会見を受けて続伸。  
月初、ユーロ/ドルは1.14台前半でオープン。利益確定の売りと思われるフローに押されて1.13台へと軟化し、4日の北朝鮮ICBM発射を受けて米国が国連安全保障理事会で緊急非公開会合を開くよう要請したとの報道にドル買いが強まり一時安値となる1.1313をつけた。しかし米金利低下の動き等で下値は支えられ、6日のECB政策理事会議事要旨を受けてテーパリング観測が強まると、パイトマン独連銀総裁のタカ派な発言なども支援材料となり1.14台を回復。11日にはトランプ大統領の長男がロシア政府の弁護士と面会したとの報道や、ブレイナードFRB理事によるハト派発言を背景に続伸。同水準では売り意欲が強く上値が押さえられ再度1.13台へと反落する局面も見られたものの、その後ドラギECB総裁が8月のジャクソンホール会議に参加するとの報道を受け金融緩和の「出口」に関する発言が期待できるとの見方が広がり値を戻す展開。  
月半ば18日には、医療保険制度改革(オバマケア)代替法案に反対する上院共和党議員が増加したことを受けてユーロ/ドルは続伸し1.1500を上抜け。さらに、英6月消費者物価指数が5月から減速したことをきっかけにユーロ/ポンドが買い進まれると、ユーロ/ドルは1.15台後半まで連れ高となった。20日のECB政策理事会では金融政策を現状維持としたが、理事会後の記者会見でドラギ総裁が量的緩和の縮小について正式な議論は秋に行うと発言したことが材料視されたほか、トランプ大統領のロシアゲート疑惑に対する強まりも相俟って1.16台へと続伸。  
月後半24日には、独7月製造業PMIが予想を下回ったことや、欧州株の軟調推移などを背景にユーロ/ドルは1.16台前半へと下押しされる局面も見られたものの、この水準では買い意欲も強く、25日には独7月Ifo業況指数が3か月連続で過去最高更新に1.17台へ乗せる展開。しかし1年11か月ぶりとなる水準では戻り売り圧力も強く、IMFがユーロ圏の景気見通しに対して下振れリスクがあると警告したこともあり一旦は1.16台へと反落するも、公表されたFOMC声明文では物価情勢に対する評価が下方修正されたことを受けドル売り優勢の展開になると1.17台を回復しロスカットを巻き込みながら1.17台後半まで上昇した。米金利が上昇基調となる中で1.16台半ばまで弱含む局面も見られたが、この水準ではユーロを買い戻す動きにサポートされ、一時高値のなる1.1845をつけ、結局1.18台前半で越月。

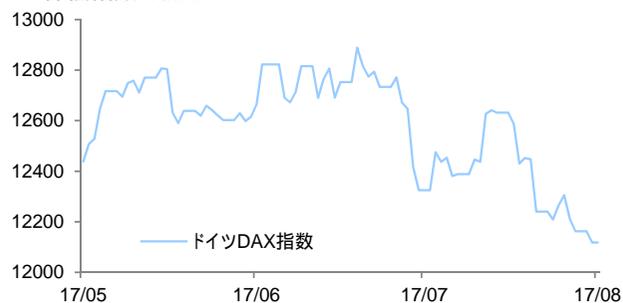
### 今月の見通し

今月のユーロ相場は引き続き底堅い展開を予想する。  
6月末以降、ECBの正常化が金融市場の一大テーマとなるなか、7月20日に行われたECB政策理事会では政策金利・資産購入額・フォワードガイダンスともに現状維持が決定された。来年にも始まると予想される政策変更の内容に関する追加的な情報発信も行われず、政策理事会後のドラギ総裁による記者会見でも新たに加わった情報としては政策変更の決定時期は事前に設定されないことが決まったことであった。同記者会見にてドラギ総裁は、6月末の「デフレ圧力はリフレ圧力に置き換わった」との自身の発言が持つ量的緩和解除に前向きなトーンを弱めることに腐心していた。足許の物価動向に自信が持てないとのコメントや、また一部で報じられていたECBスタッフに対して資産購入減額等の選択肢を検討するような指示を否定するなど、9月の政策理事会で政策変更が発表されるのではとの市場参加者からの期待沈静化を図りたいとの意図がうかがえた。  
しかしながら、足許のユーロ高に対する牽制発言もなく、結局は今秋にテーパリングが検討されることが明らかになった。その結果、市場参加者はタカ派ムード継続と受け止め、正常化を前提とするユーロ買いにプレーキをかけるまでには至らず、経済・金融情勢が目に見えて悪化を確認することができるまではユーロ高に傾きやすい状況に変わりはないであろう。テクニカル的にも、トリプルボトムのネックラインを上抜けたことで、上昇トレンドの継続が見込まれやすいものと考えられる。かかる中、ドラギ総裁は8月24日～26日に米ジャクソンホールで開催される年次カンファレンスに3年ぶりに出席するとみられており、9月7日の次回政策理事会に向けた情報発信を行う可能性があることから注目が集まる。  
一方、過度なユーロ高は南欧経済に打撃となる点については注意を要する。2008年以降のユーロ安局面では、ユーロ圏内の中で輸出競争力の強いドイツが独り勝ちを続け、域内でユーロへの不満や分裂危機を高めてきた経緯がある。ユーロ高が行き過ぎると、競争力の弱い南欧経済への下押し圧力となり、構造的なユーロの欠陥が再度露呈するリスクを抱えている。ユーロ圏金利およびユーロの急騰を受けて一部周辺国が変調をきたし始めた場合には、ECBは正常化の手を緩めざるを得なくなるとの不安や、ドイツ・イタリア総選挙という政治的な不透明要因も残されており、またユーロの上昇はデイスインフレに繋がる可能性も否定できないため、当局のユーロ高牽制発言には警戒したい。

### 為替の動き



### 株価指数の動き



### 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/17	ユーロ圏消費者物価指数(前年比)	6月	1.3%	1.3%	1.3%
7/18	独ZEW景況指数(期待)	7月	18.0	17.5	18.6
7/20	ECB主要政策金利	7月	0.0%	0.0%	0.0%
7/20	ユーロ圏消費者信頼感	7月	-1.2	-1.7	-1.3
7/24	独製造業PMI	7月	59.2	58.3	59.6
7/24	ユーロ圏総合PMI	7月	57.2	56.8	57.4
7/25	独IFO期待指数	7月	106.5	107.3	106.8
7/28	独消費者物価指数(前年比)	7月	1.5%	1.7%	1.6%
7/31	ユーロ圏CPI予想(前年比)	7月	1.3%	1.3%	1.3%
7/31	ユーロ圏CPIコア(前年比)	7月	1.1%	1.2%	1.1%

## カスタマディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

### ユーロ・ブル (10名、1.1500~1.2100、中心1.1550~1.2000)

田内	1.1500 ~ 1.2000	ドラギ ECB 総裁記者会見を受けたタカ派ムード継続との市場の受け止め方を背景に、に引き続き底堅い展開を見込む。但し過度なユーロ高は競争力の弱い南欧諸国等の経済への先行打撃となり、ECBは正常化の手を緩めざるを得なくなる不安も残るため、当局のユーロ高牽制発言には警戒したい。
加藤	1.1500 ~ 1.2000	1.16~1.200までガンマネガティブであって各レベルにロスカットオーダーが集中している可能性がある。イタリア選挙が近づいてくれば下値のリスクが再燃しようが、それまでは短期的にユーロが買われやすい環境が続こう。
矢野	1.1600 ~ 1.1900	米国でのテーパリング観測が高まる一方、欧州でもECBによる同様の観測が高まっている。物価動向等からはECBによる早期利上げは想定しにくいものの、米国でもトランプ政権に対する不透明感もあり利上げ観測が後退しつつある。前月同様、ドル安を背景とした堅調地合い継続を予想。
高田	1.1600 ~ 1.2000	底堅いユーロ相場を予想する。堅調なユーロ圏経済指標を背景にECBの金融引締め観測が意識される状況下、マーケットではユーロ買い材料への感応度が高まっている。月並みな経済指標でも欧州債金利が上昇しユーロが買われ易いであろう。饗宴は続くと思う。
佐藤	1.1500 ~ 1.2000	8月下旬にジャクソンホールで開催される経済シンポジウムでのドラギ総裁講演に向けて、ECBによるテーパリング期待が高まりやすく、スピード調整はあっても全般的にユーロは底堅い展開を予想する。
下山	1.1500 ~ 1.2100	ECBとFEDは双方にタカ派的なトーンを示しているが、政治的リスクの有無を考慮すればEURに軍配か。これまでの上昇を受けて一時的に調整が入ることも考えられるが、そもそも世界最大の経常黒字を抱えている通貨EURは次第にサポートされると考えている。
西谷	1.1600 ~ 1.2000	今月下旬に予定されているジャクソンホールではドラギECB総裁が3年ぶりに講演する予定であり、次回ECB理事会に向けた布石と捉える向きが根強い。テーパリングに関して9月会合でアナウンスした上で、来年初より開始するとの見方が大勢であり、ユーロは上方向のトレンドが継続すると予想する。
森谷	1.1500 ~ 1.2000	マーケットにおけるECBに対する緩和縮小期待は根強く、足元ではユーロ買い材料に対する反応が見られやすい状況。また、先月同様に全般的なドル売り地合いが継続しやすいと考えており、ユーロ相場をサポートする材料となりそう。引き続き上方向への推移を予想する。
鶴田	1.1600 ~ 1.2100	足許でインフレ率の伸び悩みは気になるが、ECBは着実に金融政策の正常化路線を歩んでいる印象。ドラギECB総裁は、約3年ぶりにジャクソンホールへの出席を予定しており、何らかのアナウンスに期待感が高まる格好にユーロ相場は引き続き底堅い展開を予想する。
大熊	1.1600 ~ 1.1900	ドラギ総裁は今秋に金融政策の変更について議論すると表明しており、ECBによる引き締め観測からユーロが買われやすい地合いは続くと思われる。欧州の経済指標は底堅い一方で、米国では利上げ継続の思惑が後退しトランプ政権の先行き不透明感が強まっていることもユーロのサポート要因となるだろう。

### ユーロ・ベア (2名、1.1400~1.1800、中心1.1400~1.1800)

山下	1.1400 ~ 1.1800	ECB(特にドイツ)のタカ派トーンに惑わされたところで、周縁国の物価動向は利上げを出来る環境にはなく、ECBのマイナス金利撤廃までには導入時同様にスケジュール的にもかなりの時間を要する。冷静に考えれば、2014年以降の1.20から上は買い込みづらい。
岡本	1.1400 ~ 1.1800	ECBはタカ派にシフトしているとの見方は出ているも、足元の当局者発言は慎重なトーンの内容が多くなってきた印象。次回ECB理事会では資産買入プログラムの段階的な縮小の道程こそ示されようが、利上げなど本格的な金融引き締めは当面先であり、この高値圏ではユーロは一旦売られやすいと予想。

## 英債券相場

予想レンジ: GBP/USD 1.2900 ~ 1.3500  
 GBP/JPY 140.00 ~ 155.00

欧州資金部 山本 泰平

### 先月の為替相場

7月の債券相場は1.30を挟んで上下にもみ合う展開。1.30前半でオープンし、序盤は、英6月製造業PMI(結果:54.3、予想:56.3)や、英5月鉱工業生産(結果:前月比0.1%減、前年比0.2%減)が市場予想(前月比0.4%増、前年比0.2%増)を大きく下回ったことを受け、英経済停滞感から債券が売られた。また、北朝鮮が大陸間弾道ミサイル(ICBM)の発射実験に成功したこと、有事リスクが意識され、ドルが買われる展開となったこともドル高債券安の要因となった。スイスの大手金融機関が英EU離脱に備え欧州大陸に移転することを検討し、第4四半期初めまでに決定することが報道され、英EU離脱の悪影響が強く意識されたことや、リビアとナイジェリアの原油増産や米リグ働数の増等を背景に、主要産油国の供給拡大観測が強まったことで、北海プレント先物が2週間ぶりの安値を更新したことも債券売りに拍車をかけ、12日には1.2812まで下落。一服後は、英5月労働統計で、平均賃金(除く賞与)が前年比2.0%と予想(1.7%)を上回ると債券は反転。英中銀のマカファーティ金融政策委員が、想定よりも早い量的緩和(QE)の解除を検討すべきとの見解を英紙インタビューで示したことも相俟って、18日には1.3126まで上昇。しかし、ハモンド英財務相がEU離脱に伴う「手切れ金」について公正に支払う用意があると発言したことで、将来的なユーロ買い債券売りフローの思惑が浮上し、結局、対ドルでも債券の上値が抑えられ、英6月CPIが前年比+2.6%と予想(+2.9%)を下回ったことから売りに転じ、20日に1.2933まで下落。その後は、26日に英4~6月(第2四半期)GDP成長率が著しく減速し前期比0.3%増に留まったが、反応は限定的となり、行使価格1.30ちょうどオプションが意識され、1.30を挟んで小動きとなった。

### 今月の見通し

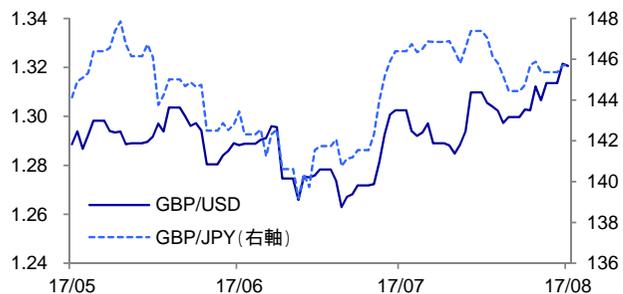
7月に入り、英EU離脱の交渉が始まる中、企業は大陸新拠点設立の計画を次々と発表している。離脱プロセスが不透明なため計画実行までは猶予があると考えられるが、交渉が進み実際に離脱が決断されれば、モノ、カネ、ヒトの流出が英経済の大きな下押し要因となるだろう。既に英経済は今年上半年に著しい減速を示し、製造業と建設のセクターでは既にマイナス成長に陥っている。しかし不可解なのは、経済指標が強くないにも関わらず、足許の債券に底堅さが見られることである。考え得る背景には、市場の注目が政治から、徐々に金融政策に移っていることが挙げられる。斯かる中、8月の注目は3日に予定される英中銀金融政策会合(金利発表、MPC議事要旨、インフレ報告書が同時発表されるスーパー・サードデー)となるだろう。弊行はインフレ報告書で英成長見通しが引き下げられ、前回利上げ票を投じたフォーブス委員が退任することや、英6月CPIが前年比+2.6%と予想(+2.9%)を下回ったことを踏まえ、6対2で政策金利は据え置きを見込んでいる。片や、前回の会合で予想外に3人(クリスティン・フォーブス、イアン・マカファーティ、マイケル・ソーンダース)の委員が利上げを支持したことに加え、ハルデーン理事が利上げについて「真剣に検討し、下半期にも利上げを支持する公算が大きい」との認識を示したことから、市場ではタカ派的スタンスを見込む向きもある。7月のOIS市場では、6割の確率で17年中の利上げを織り込む場面もあった。マーク・カーニー総裁は足許の英国経済について懐疑的な見方を崩さない一方で、利上げへの支持が向こう数カ月で強まる可能性があるとも発言しており、他の主要国中銀が既にバランスシート縮小に向けた計画を示し始める中、英中銀だけが座視するわけにはいかないという気持ちがあるにありそうだ。利上げまで至らずとも、出口に関し議論される可能性は大いにある。米国におけるオバマケア代替法案の挫折や、大型減税を含む一連の拡張財政も実現が危ういとの思惑が強まる中、ドル・ロング手仕舞いムードも相俟って、債券は買われやすい地合いとなるかもしれない。

### 今月のつばやき(現地からの声)

『当地の盛んなスポーツ』  
 英国で盛んなスポーツといえば、テニスかフットボールです。ただ、7月に限って言えば、ウィンブルドン選手権(全英オープン)が開催されるので、テニス一色のムードです。英国では、ほとんどの公園にテニスコートが併設される程、浸透していますが、特にこの時期になると、テニスプレーヤーの人口が急増する気がします。テニス観戦者はさらに多く、シーズン中、ウィンブルドン駅周辺は人でごった返しています。筆者も、錦織圭選手VSロベルト・バウティスタ選手の試合を生観戦するため、始発でウィンブルドンへ向かい、早朝6時から並びましたが、既に7千人の列ができていました。トップ選手の試合を生で見たいという強い熱意を持っている英国人が前日からテントを張って並んでいるので、早朝からでは間に合わないこともあります。ちなみにオフシーズンには、ウィンブルドンは閑静な住宅街に姿を戻します。会場はもともと会員のみに限定されたクラブなのでオフシーズンに一般人が行っても、博物館の見学以外に、やる事はありません。どうやったら会員になれるのか一度、調べたことがあるのですが、関係者によると全英オープンで優勝するか、クラブ会員4名以上の推薦状が入会の条件のようです。ただし、入会希望者は千人待ちなので、新規入会は、非常に難しいとのこと。最近、例外的に即座に受理されたケースもあったようですが、イギリス王室の申請でした。

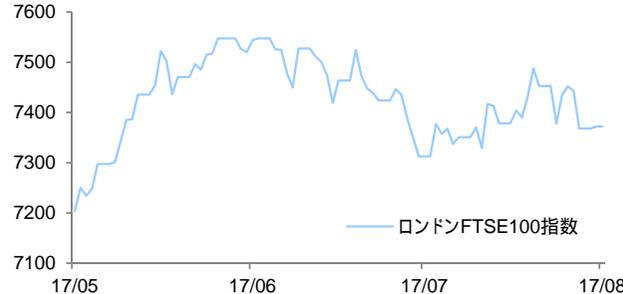
### 為替の動き

(資料) ブルームバーク



### 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



### 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/3	製造業PMI	6月	56.3	54.3	56.3
7/4	建設業PMI	6月	55.0	54.8	56.0
7/5	サービス業PMI	6月	53.5	53.4	53.8
7/7	鉱工業生産(前年比)	5月	0.2%	-0.2%	-0.8%
7/7	製造業生産(前年比)	5月	0.5%	-0.2%	0.2%
7/14	ILO失業率	3-5月	4.6%	4.5%	4.6%
7/18	消費者物価指数(前年比)	5月	0.5%	-0.2%	0.2%
7/26	GDP(前期比)	2Q	0.3%	0.3%	0.2%

# 豪ドル相場

予想レンジ: AUD/USD 0.7800 ~ 0.8150  
AUD/JPY 86.00 ~ 90.00

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 山口 美紀

## 先月の為替相場

7月の豪ドルは約2年ぶりに0.80台に到達。

3日、豪ドルは0.76半ばでスタート。翌日、注目の豪州準備銀行(RBA)理事会では、一部期待されたタカ派(金融引締積極派)な内容はRBA声明文に盛り込まれず、豪ドルは0.76近辺に下落した。その後、豪ドルは0.76を挟んで揉み合い推移が続いた。

11日、鉄鉱石や原油等の商品価格の上昇にサポートされ、豪ドルは0.76半ばに上昇。翌日のイエレンFRB議長の議会証言では、物価の先行きに対する不透明感に言及した部分がハト派(金融引締積極派)と解釈され、ドル売り進行。豪ドルは0.76後半に続伸。13日、中6月貿易収支の輸出入の大幅増加を受けて、豪州の輸出増加の思惑が強まり、豪ドルは0.77台に上伸。翌日、米6月消費者物価指数(CPI)が市場予想を下回る結果となり、米利上げ観測が後退、ドル売りから豪ドルは0.78台に続伸した。18日、7月のRBA理事会の議事要旨では、RBAが中立金利を巡る議論が示されたことが明らかになった。市場では、中立金利の議論は利上げの最初のステップと解釈され、豪ドルは0.79台に急伸。

20日、豪6月雇用統計では、フルタイムが大幅増加したことから、良好な豪州労働状況が窺え、豪ドルは0.7989まで急伸した。しかし、24日、デベールRBA副総裁は「この前の理事会で中立金利が議論されたことについては、深読みすべきではない」と述べ、RBAの早期利上げ観測が後退し、豪ドルは0.78後半に下落した。26日、注目の豪4~6月期CPIがインフレターゲット下限2%を下回る1.9%の上昇に留まった。同日、ロウRBA総裁も緩やかな金融政策の維持を示し、豪ドルは横ばい推移。しかし、27日早朝のFOMCにて、バランスシート縮小は比較的早期に実施と示されるも、米インフレ動向に対する懸念が指摘され、ドル売り進行。豪ドルは0.80ドル台に急伸した。その後もドル売り/豪ドル買いの流れが続き、豪ドルは2年ぶり高値となる0.8066を付けた。その後は、0.80を挟んで揉み合い推移して、越月。

## 今月の見通し

先月の豪ドルは0.76から0.80と約5%急伸した。背景は主に3つ考えている。①RBA議事録で明らかになった中立金利の議論、②ハト派なFOMC声明文、③堅調な商品価格。今月も豪ドル高に作用する可能性があるものは②のみで、今月の豪ドルは0.80を挟んだ横ばいを予想する。それでは、一つずつ検証していく。

まず、国際決済銀行(BIS)は6月25日公表の年次報告書において、高水準の債務や生産性の低い伸び、政策効果の低下など一部でリスクが残るものの、政策当局は景気見通しが改善する一方でそうした改善が意外なほどにインフレに影響していない状況を好機ととらえ、量的緩和と歴史的な低金利の大きな巻き戻しを加速するべきとの見解が示された。BISのレポートを受けて、主要国の中央銀行は金利の引き上げを進めるべきとの主張が最近の動きに影響を及ぼしているのか、それとも偶然の一致なのかは定かではないが、RBAもこの動き(流れ)に沿ったものだろう。しかし、豪州のインフレはインフレターゲット(2~3%)を下回っており、RBAはしばらく金利を据え置くだろう。

次に、向こう数か月間は、FRBは低成長を示す兆候に特に敏感になるだろう。インフレ率が目標を下回っている今、慎重に進めてきた利上げとバランスシート縮小の計画続行を後押しする材料は少ない。そこに経済成長が減速すれば、FRBとして打てる手は極めて限られている。一方で、インフレ率が上昇すれば、金融市場には大きなサプライズとなり得る。市場が現在織り込む年内の追加利上げの確率は50%を割り込んでいる。

最後に、商品市況。6月のOPEC協調減産以降、原油相場は底堅く推移している。NY原油先物(WTI)も50ドル目前に上昇している。しかし、シェールオイルによる米国の原油生産増産懸念もあり、50ドルを超えて上昇継続は難しいだろう。また、豪州最大輸出品目の鉄鉱石も6月安値の53ドルから今月70ドル台を回復したが、70ドルで2度反落しており、上昇に服感が出てきている。堅調な商品市況も次第に終焉すると考える。

以上のことから、先月豪ドルを急伸させた①~③の材料の内、①③は今月は豪ドル高に作用しないと思われる。一方、②については、今月の米経済がカギを握っており、冴えない米経済指標が発表されれば、引き続き、米ドル売り/豪ドル買い継続の可能性がある。

## 今月のつばやき(現地からの声)

『当地の盛んなスポーツ』

スポーツ大国オーストラリア、人口一人当たりのメダル獲得率では世界トップクラスだと思われます。街の人々を見ても朝も夜もトレーニングに励んでいる人がたくさんいます。早速、オーストラリアで盛んなスポーツを列挙していきます。ラグビー(3種、ユニオン、AFL(オーストラリアンフットボールリーグ)、NRL(ナショナルラグビーリーグ)、クリケット、サッカー、テニス、ゴルフ、サイクリング、水泳、サーフィン、ダイビング、ビーチバレー、ボート、グランドホッケー、フリスビー等。

ここからは、オーストラリア特有のスポーツ!

◆ネットボール: バスケットボールのルールを基準に、女性が競技できるよう改良された競技。オーストラリアの小学校の女子スポーツと言えば、ネットボールです。

◆ニッパーズ・レース: 7歳から13歳までの幼いライフセーバーをニッパーズと言います。ニッパーズは他のライフセービング・クラブと対抗して競技実施。小さい子供の習い事の一つでもあります。

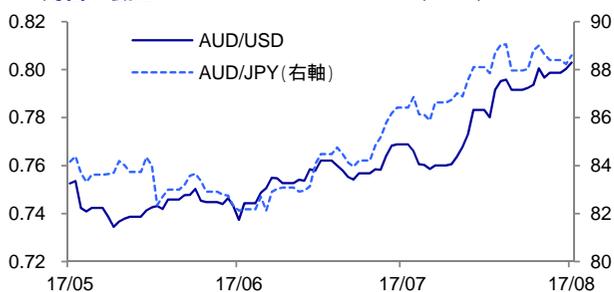
◆アイアンマン: トライアスロン的一种。スイム3.8km、バイク180km、ラン42.195kmと距離が長く、最も過酷なレースでしょう。オーストラリアでは、10~70代の世代が参加しています。

◆ローンボウルズ: 芝上で、偏心球を目標球のどれだけに近づけられるかを競う球技、ボウリングの前身とも言われる。会社後、靴を脱いで裸足でローンボウルズ、その後芝の上でビールとピザで打ち上げ、今夏の弊行ソーシャルクラブのイベント案です。

最後に、今年一番盛り上がった試合は、日本VS豪州のFIFA予選戦@メルボルン! 支店メンバーでパブで観戦。結果は1-1引き分け。試合後、皆笑顔で両手で一本指ポーズで写真撮影して、仲良く観戦終了。今月のつばやきもここで終了、ピッ、ピッ、ピーー(笛の音)。

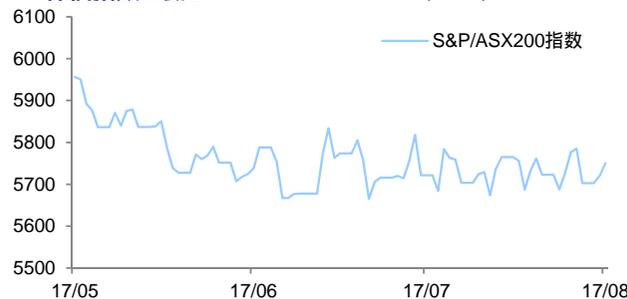
## 為替の動き

(資料) ブルームバーグ



## 株価指数の動き

(資料) ブルームバーグ



## 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/3	建設許可件数[前月比]	5月	-1.3%	-5.6%	4.8%
7/4	小売売上高[前月比]	5月	0.2%	0.6%	1.0%
7/4	RBA政策金利		1.50%	1.50%	1.50%
7/6	貿易収支	5月	A\$1000MA\$2471M	A\$90M	
7/11	住宅ローン承認件数[前月比]	5月	1.5%	1.0%	-1.9%
7/20	雇用者数	6月	15.0千人	14.0千人	38.0千人
7/20	失業率	6月	5.6%	5.6%	5.6%
7/26	CPI[前期比/前年比]	4-6月	0.4%/2.2%	0.2%/1.9%	0.5%/2.1%
7/26	トリムCPI[前期比/前年比]	4-6月	0.5%/1.8%	0.5%/1.8%	0.5%/1.8%
7/26	加重平均CPI[前期比/前年比]	4-6月	0.5%/1.7%	0.5%/1.8%	0.5%/1.7%

# カナダドル相場

予想レンジ: USD/CAD 1.2200 ~ 1.2700  
CAD/JPY 87.00 ~ 93.00

グローバルマーケッツ業務部カナダ室 那須 絢子

## 先月の為替相場

カナダ中銀ウィルキンス副総裁、ポロズ総裁の発言により6月中旬から急速に利上げ観測が高まり、カナダドル高が進んできたドル/カナダドルは7月は1.30前半でスタート。7月12日の政策金利会合前に発表される最後の主要経済データとして注目されていた7月7日の6月失業率は6.5%と前月に比べ0.1%の改善が見られ、また新規雇用者数も予想の1万人を大きく上回る4.53万人と好調な結果となった。この発表を受け7日のドル/カナダドルは急落、1.29台を下抜けし1.2876でクローズ、市場は12日の利上げを完全に織り込む状態となった。

そして7月12日、カナダ中銀は2010年以来7年ぶりとなる利上げを実行、政策金利(翌日物貸出金利の誘導目標)を0.25%引き上げ0.75%とした。今回利上げに踏み切った理由として、最近の経済指標では予想を上回る成長が見られ、カナダ経済の堅調な成長が今後も継続するとの自信が強まったためと述べている。また一部から懸念の声が上がったインフレ率の弱さに関しては、一時的であり2018年以降には目標の2%以上になるとの見解を同時発表の声明文にて明らかにした。予想通りの利上げであったが、経済需給ギャップ解消の予想時期も2018年前半から2017年末に前倒し、少なくとも年内の25bspの追加利上げが十分に読み取れる内容であったことから、カナダドルは一段高となり、ドル/カナダドルは前日から1.18%安の1.2751まで下落した。

12日の利上げ以降もカナダ経済データは予想を上回る好調な数値が続き、21日に発表されたカナダ6月消費者物価指数(CPI)は、コアが前年比+1.4%と前月から上昇したためにカナダドル高が更に進んでこの日のドル/カナダドルは1.26前半から1.25前半へと大きく動いた。

28日発表の5月GDP(国内総生産)は鉱工業や製造業をはじめ、エナジーセクターでも堅調な成長が見られ、結果は前月比+0.6%(予想:+0.2%)、前年比は+4.6%(予想:+4.1%)と予想を大きく上回り、2000年以来最大伸びとなった。一方、同時に発表された米国の第二四半期月期GDP速報値は予想を下回る前年比+2.6%(予想:+2.7%)という結果であったために発表後、ドル/カナダドルは0.8%安の1.2440まで下落した。

## 今月の見通し

近頃の強弱まちまちの経済データや低下するインフレ率に加え、ロシアゲート疑惑で政治不信が高まる米国を横目に回復地合が継続する最近のカナダ経済。カナダドルは5月初旬以来10%近く上昇、31主要通貨の中で一番のパフォーマンスを見せている。

28日の5月GDP発表後に1.2422をつけ、25ヶ月ぶりの最安値となる1.24110へと限りなく近づいたドル/カナダドルだが、8月も予想を上回る経済成長が続けば2018年の追加利上げの織り込みが高まることが想定され、今までのような勢いは減速するものの徐々にカナダドル高が進むと考えられる。

今後の継続したカナダドル高への材料として原油価格(WTI)、また相場かく乱要因としては8月16日から始まるNAFTA(北米自由貿易協定)の再協議を挙げたい。

原油価格(WTI)は7月中、数週間連続で在庫減少が確認されていることや、サウジアラビアの輸出量削減の報道、また米国のリグ稼働数が減少などが理由で月初めに比べ3ドル以上上昇した。28日現在は49ドル後半で取引されており、輸出の3割近くをエネルギー関連製品が占めるカナダとしては原油価格がこれから50ドル台へ回復、更に上昇維持が可能か注目される。

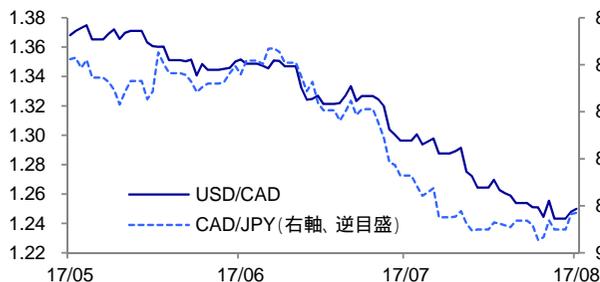
4月に一度NAFTA脱退の意向を示したトランプ大統領だったが、その後再交渉に応じることを決めた。そして8月16日からワシントンDCでの再交渉が開始される。メキシコ、カナダは25年前に合意されたこの貿易協定を現代にふさわしい内容へと進歩させる用意があると前向きな姿勢を見せている。再交渉の第一ラウンドでトランプ政権の保護主義的な内容が提示されるか、カナダに有利となる交渉へと持っていけるのか、交渉決裂への道を辿るのか…ドル/カナダドル相場が大きく動くすれば16日以降をだろう。予想レンジは1.22~1.27。

## 今月のつばやき(現地からの声)

『当地の盛んなスポーツ』  
カナディアンに人気なスポーツといえば、アイスホッケー、フットボール、バスケットボール、野球などが挙げられます。なかでもアイスホッケーはカナダのナショナルスポーツでものあり、その人気は圧倒的です。世界プロホッケー界で最高峰とされるナショナルホッケーリーグ(NHL)は米国の23チームとカナダの7チームの合計30チーム(今年から31チーム)で構成されています。レギュラーシーズンは10月初旬から始まり、各チーム82試合行います。各ディビジョンで上位2位のチームがプレイオフへと進み、最後は勝ち残った2チームでNHLの頂点を決めるスタンレーカップファイナルで最終対決…シーズン構成は他のメジャーなスポーツと一緒にですね。  
私は最近、30代になってやっと野球やバスケ、サッカーなどのスポーツ観戦を楽しむようになりました。その中でもアイスホッケーはアクション満載でスピード感もあって楽しいのですが、1つだけ問題が…。ホッケーバックの動きが早すぎて目が追いついていけないんです。気が付くとゴールしてたとか…ゴールしたと思ったらセーブされてたとか…。  
現地の友人いわく「選手の動きをちゃんと見てたらバックがどこにあるか分かるよ」ということでやってみましたが、未だによくバックが視界から消えてしまいます。そのうち馴れてくれるのでしょうか…? 昨年は4年ぶりに地元のトロントメイブルリーフスがプレイオフまで進んだので、今年はレギュラーシーズンからチームを応援してみたいと思います。シーズンが終わる頃には動体視力が上がっていることを願って。

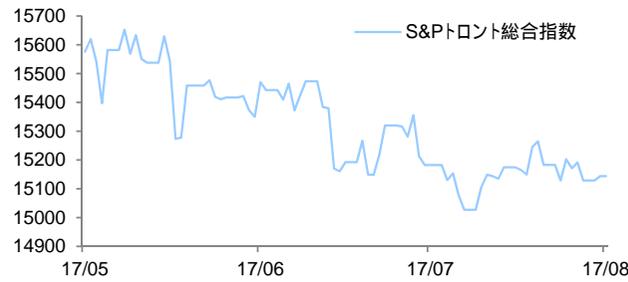
## 為替の動き

(資料)ブルームバーグ



## 株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



## 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/4	マーキットカナダ製造業PMI	6月		54.7%	55.1%
7/7	雇用ネット変化	6月	10.0k	45.3k	54.5k
7/7	失業率	6月	6.6%	6.5%	6.6%
7/11	住宅着工件数	6月	200K	212.7K	194.7K
7/12	カナダ中銀政策金利発表		0.50 - 0.75%	0.50 - 0.75%	0.50 - 0.50%
7/19	製造業売上高(前月比)	6月	0.80%	1.10%	1.10%
7/21	消費者物価指数コア(前年比)	7月	1.3%	1.4%	1.3%
7/24	小売売上高(前月比)	5月	0.3%	0.6%	0.8%
7/28	GDP(前月比)	5月	0.2%	0.6%	0.2%
7/28	GDP(前年比)	5月	4.1%	4.6%	3.3%

## 韓国ウォン相場

予想レンジ:

USD/KRW	1090	~	1140
KRW/JPY	9.62	~	10.10
JPY/KRW	9.90	~	10.40

(注)100韓国ウォンあたりの対円レート

ソウル資金室 山口 智裕

### 先月の為替相場

7月のドル/ウォンは反落。

ドル/ウォンは1143.5で取引を開始。4日に北朝鮮が新型の大陸弾道弾ミサイル「火星14号」の発射に成功したとの”特別重大放送”を実施。これを受けて米国のレッドラインを超えたのではとの一部思惑などから地政学リスクが意識された。また、7日に米雇用統計を控えていたこともあり、6日のドル/ウォンは月高値となる1157.9まで上昇した。

しかし、11日のブレイナードFRB理事や12日のイエレン議長の発言がハト派的なものとなったほか、14日の米6月CPIが市場予想を下回ったことから、ドルが下落。また、20日のECB理事会では通貨高への牽制が見られなかったことから、ユーロ/ドルが上昇したことや、26日のFOMC後にも一段とドルが下落したことを受けて、27日には月安値となる前月末比▲33.6ウォン高の1110.5まで下落した。28日の海外時間に北朝鮮が大陸弾道弾ミサイルを再度発射したものの、その後も上値重く推移し、前月末比▲25.1ウォン高の1119.0で引けた。

韓国銀行は、金融通貨委員会です市場予想通り政策金利を1.25%に据え置いた。また、2017年の成長率見通しを+2.8%と4月に発表した+2.6%から上方修正した。李総裁は、その後の記者会見で、結果が全会一致であったこと、今回の上方修正には補正予算を見込んでいないこと説明。また、今後の見通しについては、成長が継続する場合、金利水準の調整を行う可能性があるとし、方向性についてはメンバーで共有していると述べた。

韓国国会は22日、107議席を有する最大野党である自由韓国党が集団退場する中、11兆333億ウォンの追加補正予算を可決。争点だった国家公務員増員数は当初政府案の4500人から2575人に縮小された。

### 今月の見通し

8月のドル/ウォンは、上値の重い展開を予想する。

韓国4-6月期実質GDPは前年比で+2.7%となり、前期の同+2.9%からは減速したものの、底堅く推移している。7-9月期は輸出の伸びが拡大し、現在マイナスとなっている純輸出の寄与度が改善していくと思われる。また、補正予算が最大野党である韓国自由党の反発を受けつつも、韓国国会を通過した。このことから、年後半の成長率は一段と高まる可能性がある。韓国銀行の李総裁は、成長が継続する場合、金利水準の調整を行う可能性があるとして説明しており、8月に発表される経済指標次第では一段と利上げ見通しが高まる可能性がある。

米国に関してはインフレ指標を中心とした経済指標が伸び悩んでいる。FEDは物価の伸び悩みは一時的との見方を維持しているが、月前半の経済指標で良好な数字が確認されない場合、ドルは上値が重い展開が継続する可能性がある。

### 今月のつばやき(現地からの声)

『当地の盛んなスポーツ』

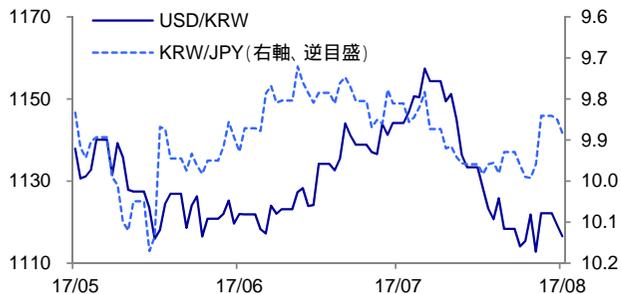
当地で国民的スポーツと言えば、野球、サッカーあたりでしょうか。日本と同じく、国内リーグは野球が人気で、代表戦になるとサッカーを見る人が多いようです。加えてバスケットボール人気もやや高まってきているようです。

サラリーマンに人気なのはゴルフです。以前このコラムでも記載しましたが、当地には多くのシミュレーションゴルフ店があり、しばしば飲み会などでも使用されています。「おじ様方を中心に人気なので、女子プロへの整形手術プレッシャーが強く、それによってスポンサーの付き方が違う」とのゴシップ記事を見ましたが、真偽は不明です。

また、国民的とはほど遠いですが、最近若者にじわじわ人気が出てきているのがボーリングだそうで、他のレーンの人にナンパをし、一緒にボーリングをするとのこと。最近たまにいくボーリング場が、やたら暗く、クラブみたいな音楽がかかり、アルコールの提供をしていると思っていたら、そういうことだったのかと納得してしまいました。

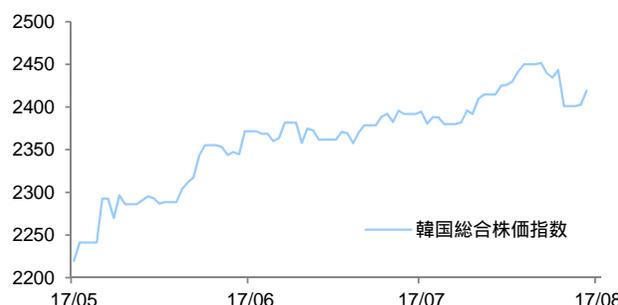
### 為替の動き

(資料)ブルームバーグ



### 株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



### 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/3	日経韓国製造業PMI	6月	--	50.1	49.2
7/4	消費者物価指数(前年比)	6月	2.0%	1.9%	2.0%
7/12	失業率(季調済)	6月	3.7%	3.8%	3.6%
7/13	韓国銀行7日間レオレート		1.25%	1.25%	1.25%
7/21	輸出 20日間 前年比	7月	--	22.4%	24.4%
7/21	輸入 20日間 前年比	7月	--	13.3%	20.7%
7/25	消費者信頼感	7月	--	111.2	111.1
7/27	GDP(季調済/前期比)	2Q P	0.6%	0.6%	1.1%
7/27	GDP(前年比)	2Q P	2.7%	2.7%	2.9%
7/28	鉱工業生産(前年比)	6月	1.1%	-0.3%	0.1%

# 台湾ドル相場

予想レンジ: USD/TWD 30.00 ~ 30.70  
TWD/JPY 3.55 ~ 3.80

台北資金室 三浦 勇二

## 先月の為替相場

7月のドル/台湾ドル相場は、ドル安台湾ドル高。

月初30.410でオープンしたドル/台湾ドルは、7/3に発表された米6月ISM製造業景況指数が市場予想を上回ったことなどを背景に米金利が上昇すると、翌7/4には4/12以来となる30.5台へ乗せる展開。その後も、6月のECBドラギ総裁のタカ派的な発言を受けてECBの金融緩和縮小が意識される中、欧州金利の上昇とともに米金利の上昇も続いたことに加え、輸入企業のドル買いフローなども材料にドル高地合いが継続し、7/6には30.6台まで上昇。

7/7に発表された米6月雇用統計では、注目された平均時給(前年比)が+2.5%と市場予想+2.6%を下回るも、非農業部門雇用者数が+22.2万人と市場予想+17.8万人を上回る強弱入り混じる結果となり、FRBの利上げペースを鈍化させる内容ではないとの見方が広がると、週明け7/10の台湾市場では、ドル高の流れが継続し、30.620の7月の高値をつける展開となった。

月半ばにかけては、トランプ大統領の長男が大統領選期間中にロシア人弁護士と面談したことに関するメールが公開されたことや、イエレンFRB議長が議会証言において、物価の先行きに不透明感があると言及したことがソフト派的と受け止められたことなどから、米金利低下とともにドル売り圧力が強まると、株式市場への外国人投資家の資金流入も相俟って、30.3台まで下落。

月後半は、医療保険制度改革(オバマケア)代替法案に上院共和党議員が反対姿勢を表明し、可決は困難との見方が広がったことや、モラー特別検察官がロシア疑惑に関して捜査対象を拡大すると報じられたことなどから、ドルが軟調に推移。また、FOMCでバランスシート縮小開始時期が「比較的早期」へと変更される一方、物価の評価が下方修正されると、米金利が大幅に低下。月末にかけての実需の台湾ドル買いフローの増加もあり、一段と台湾ドル高が進む中、一時30.200をつける場面もみられた。

## 今月の見通し

8月のドル/台湾ドル相場は、上値の重い展開を見込む。

7月に発表された台湾の経済指標をみると、6月の消費者物価指数が前年同月比+1.00%。天候不順による生鮮食品の値上がりが影響し、前月の同+0.59%から物価の伸びが加速。6月の輸出額は、前年同月比+13.0%と9か月連続の増加。引き続き、スマートフォンの新機種投入に伴う半導体関連製品の需要が好調な輸出を支えている。なお、2016年後半からの輸出の回復が続く中、6月の貿易黒字額は58億ドルで、単月ベースでは過去最大を更新する結果となった。

8月は、FRBによる金融政策ならびに、米経済指標の結果に加え、台湾の株式市場における外国人投資家の動向が注目される。

米国の金融政策については、インフレ関連指標をはじめ、米経済指標の弱い結果が続いている中、イエレンFRB議長は、議会証言でインフレ率の不確実性に言及しており、7月FOMCにおいても物価の評価が下方修正される結果となった。今後の利上げペースについての不透明感が強まる中、先物市場でも利上げの折り返しが進まない状況が続いており、今後の経済指標の結果や、それを受けたFRB高官の発言には注目が集まる。

台湾側の材料としては、引き続き、株式市場における外国人投資家の動向が注目される。6月に外国人投資家の資金流入ペースが鈍化し、月間ベースで半年ぶりに台湾ドル安となった要因のひとつとなったが、台湾加権指数が10,500台湾ドル近辺で上値が重くなる中、7月も資金流入のペース鈍化は続いている。こうした中、2017年前半のように、株高とともに急速に台湾ドル高が進むという相場環境ではないものの、好調な輸出を背景とした実需の台湾ドル買いと、軟調なドルを背景に、ドル/台湾ドルは上値重く推移すると見込む。

## 今月のつづやき(現地からの声)

『当地の盛んなスポーツ』

台湾でスポーツといえば、①野球、②バスケットボール、③自転車特に盛んに行われています。

### ①野球

日本のプロ野球で活躍している台湾人選手もおり、イメージしやすいかも知れません。過去には野球賭博や八百長問題の発生により、球団数が減少し、台湾のプロ野球が存続の危機に陥った時期もありましたが、WBCでの台湾チームの活躍もあり、人気は回復傾向にあるようです。

### ②バスケットボール

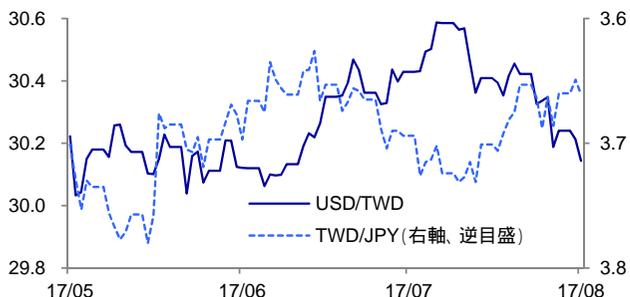
現在、野球に負けず劣らずの人気があります。プロリーグも存在し、テレビ中継も頻繁に行われています。学生や子供にも非常に人気が高く、大きな公園などでは、必ずといっていいほどバスケットゴールが見かけられます。

### ③自転車

世界一の自転車生産国といわれる台湾だけに、サイクリング人口の割合は、日本と比較しても非常に高いようです。サイクリングロードの整備も進んでおり、休日には台湾メーカーの自転車でサイクリングに出かける人も多く見られます。また、街中では、自転車シェアリングが広く普及しており、台北市では「YouBike」や、「oBike」といったシェア用自転車があちらこちらで見かけられます。

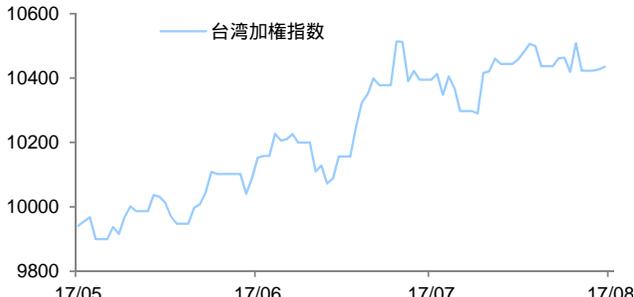
## 為替の動き

(資料)ブルームバーグ



## 株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



## 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/5	消費者物価指数(前年比)	6月	0.90%	1.00%	0.59%
7/5	卸売物価指数(前年比)	6月	-1.90%	-1.68%	-1.12%
7/5	外貨準備高	6月	-	441.94B	440.25B
7/7	貿易収支	6月	3.20B	5.83B	3.46B
7/7	輸出(前年比)	6月	8.80%	13.00%	8.40%
7/7	輸入(前年比)	6月	12.00%	3.70%	10.20%
7/20	輸出受注(前年比)	6月	7.00%	13.00%	9.10%
7/24	失業率	6月	3.79%	3.78%	3.79%
7/24	鉱工業生産(前年比)	6月	1.95%	3.14%	0.78%
7/28	GDP(速報値)	Q2	2.24%	2.10%	2.60%

## 香港ドル相場

予想レンジ: USD/HKD 7.7900 ~ 7.8300  
HKD/JPY 14.00 ~ 14.50

香港資金部 Ken Cheung

### 先月の為替相場

#### 【7月の香港ドル直物相場】

ドル/香港ドルは一時的に約18か月ぶりとなる7.8142準まで香港ドル安が進行する局面も見られたものの、その後は7.80から7.81水準のレンジ内での推移が継続した。香港ドル金利は潤沢な流動性状況から米ドルとのベッグ制であるにもかかわらず安定して推移しており、香港ドル金利とドル金利の金利差は引き続き拡大している状況。一方で、米国のトランプ政権運営に対する不透明感の高まり等からドル売り優勢の流れが強まり、年初来からの香港ドル安の流れに一服感が見られる展開となった。ドル/香港ドルフォワード1年物については、先月初と同水準の▲530ポイント近辺にて推移した。

#### 【7月の香港ドル金利市場】

香港ドル金利は流動性が相対的に潤沢であることから安定して推移した。インターバンク市場の流動性を図る指標である香港通貨管理局(HKMA)の当座預金残高は、10か月連続で2,600億香港ドル程度と高水準になった。香港のHIBOR1か月物は0.43%付近まで低下し、LIBOR1か月物との香港ドル金利とドル金利の金利差は約0.8%程度まで拡大した。HIBOR3か月物については、0.77%付近で小動かな展開となった。香港ドルスワップ金利については、ドルスワップ金利の低下の影響を受けて低下基調が継続した。ドル/香港ドルの通貨ベースは、海外勢による債券発行に係るヘッジフローが一服したことから相対的に安定した推移となった。

#### 【7月の香港株式市場】

米国の利上げペース鈍化の懸念等も相俟って、香港市場に対し中国本土を含む海外からの資金流入が加速する展開となった。ハンセン指数は、テクノロジー関連株が上昇を牽引し一時的に26,889水準まで上昇する局面も散見され、約25か月ぶりに高値を更新する等、堅調に推移した。

### 今月の見通し

#### 【8月の香港ドル直物相場】

米国のインフレ見直しに対する不透明感の高まり等、2017年における米国利上げペースの鈍化等から、足許のドル安香港ドル高の流れは継続すると見込まれ、ドル/香港ドルの取引レンジは7.79から7.83を想定する。中国本土を含む海外投資家からの資金流入により香港株は堅調に推移しており、香港ドル高の一助となる。一方で、根強い香港ドル安の流れから今後7.83水準まで香港ドル安が進行する場合等には、香港通貨管理局(HKMA)は香港市場の足許の流動性をコントロールする手段を講じてくると見込み、市場から資金を吸収する役割がある為替基金短期債券の発行による香港ドル金利の引き上げを徐々に実施する可能性があるとして想定する。目先は、香港ドル金利とドル金利の金利差は引き続き拡大しており、7.85水準までの急速な香港ドル安は想定し難いものの、総じて7.85水準の過度な香港ドル安が進行するより前に、先んじて相場を安定させる措置を講じるだろう。

#### 【8月の香港ドル金利市場】

足許香港ドル市場の流動性は潤沢な状況が継続しており、香港ドル短期金利は低位安定を見込む。FRBによる2017年における政策金利の引き上げやバランスシート縮小等に関する実行時期について不透明感が漂う中、香港ドル金利の引き上げについても徐々に後倒しになると想定される。一方で、米国以外の金融政策動向により、グローバルに金利上昇圧力が高まる局面等においては、香港市場からの資金流出圧力が強まり、香港ドル金利が上昇に転じる展開に留意したい。

### 今月のつづやき(現地からの声)

#### 『当地の盛んなスポーツ』

島全体を海に囲まれた香港では、意外にもマリンスポーツが盛んに行われている。

夏場になると、海岸沿いの街々には多くの人たちが集い、最近では個人や団体で香港島から近場の離島までのボートトリップ等も開催されている模様。

もちろん、ウエイクボードやサーフィン等も出来る場所もあり人気を集めている。

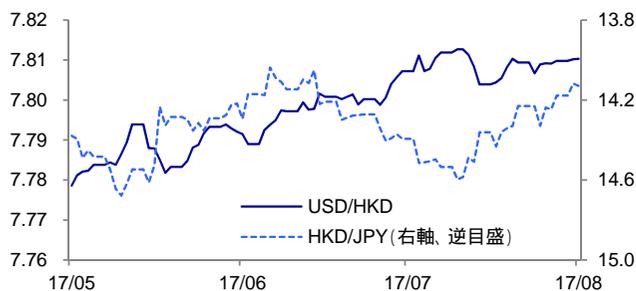
特に、台風が近づくこの季節は、高くコンディションの良い波を求めて、大雨の中海に出向く者たちも散見される。

あまり知られてはいないが、香港離島区出身の元ヨット選手であるリー・ライ・シャンは、1996年のアトランタオリンピック・ヨット競技ミストラル級において、香港選手初の金メダルを獲得している。

子供の頃から、地の利を生かしてウインドサーフィンに親しんでいたとのことで、今でもウインドサーフィンは香港人が楽しむマリンスポーツの一つとなっている。

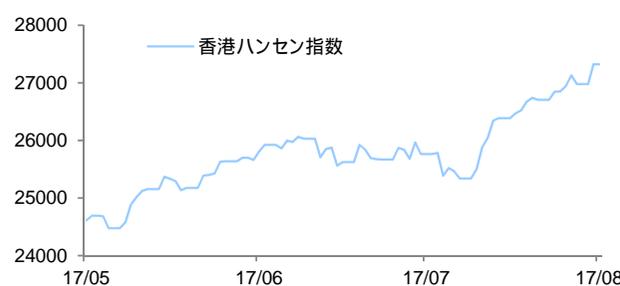
### 為替の動き

(資料)ブルームバーグ



### 株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



### 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/5	日経香港PMI	6月	-	51.1	50.5
7/7	外貨準備高	6月	-	\$408.0b	\$402.7b
7/18	失業率(季調済)	6月	3.2%	3.10%	3.20%
7/19	総合利率	6月	-	0.31%	0.31%
7/20	CPIコンボジット(前年比)	6月	2.10%	1.90%	2.00%
7/27	輸出(前年比)	6月	6.40%	11.10%	4.00%
7/27	輸入(前年比)	6月	5.20%	10.40%	6.60%
7/27	貿易収支(HKD)	6月	-48.3b	-48.3b	-35.6b

(資料)ブルームバーグ

## 中国人民元相場

予想レンジ: USD/CNY 6.6500 ~ 6.9500  
 CNY/JPY 15.40 ~ 17.29  
 100JPY/CNY 5.7800 ~ 6.4300

みずほ銀行(中国)有限公司 中国為替資金部 馬場 一樹

### 先月の為替相場

#### 【為替相場】

7月のドル/人民元相場はドル安人民元高が進行。月初のドル/人民元実勢相場は6.78近辺でオープン。6月の米ISM製造業指数が予想を大幅に上回ったことを背景にドル買いが強まる中、ドル/人民元も6.80近辺までドル高人民元安が進行。暫く6.80近辺で横ばい推移となっていたものの、米国ではイエレンFRB議長の議会証言が市場でハト派と捉えられたことや、トランプ大統領の長男とロシア人弁護士間のやり取りを巡る問題で政権運営への懸念が高まったこと、オバマケア代替法案が共和党内で票を得られず事実上可決困難となったこと等を背景にドル円は114円台前半から111円台半ばまで下落。ドル/人民元もグローバルにドル安が進んだことや、当局による介入と思しき動きが入ったこと等を背景に一時6.75割れまでドル安人民元高が進んだ。その後一旦は6.77超まで戻すも、纏まったドル売り人民元買いのフローや、FOMC後のドル売り等を背景に6.73割れまで人民元高が進んだ。中国の4-6月期GDPは前年比+6.9%と予想を上回る内容だったものの、相場への影響は限定的だった。

#### 【金利相場】

1か月超のターム物は金利低下が継続も、月末越えとなる短いターム物については月後半にかけて金利上昇。市場流動性が潤沢な中、月初は半期末を越えて資金需要も落ち着き、中資系大手行による旺盛な資金放出ニーズを背景にカーブ全般で金利低下。リバースレポやMLFによる資金供給もあり、前半は市場流動性が維持された。月後半も引き続き市場流動性が維持される中、1か月超のターム物については中資系大手行からの資金放出が引き続き見られた一方、資金調達ニーズは乏しく、カーブ全般に亘り金利低下。しかし、納税に伴う資金需要が強まるとの見方も強い中、市場参加者が短いタームに偏った資金調達を継続していることもあり、1週間物等短いターム物についてはファンド勢や一部の株式制商業銀行からの資金調達ニーズが強く、金利上昇。

### 今月の見通し

#### 【為替相場】

8月のドル/人民元相場はレンジ内での推移を想定。例年8月はイベントも少なく、日本や海外でも夏季休暇に入る投資家も多いと、全体的に閑散な相場となることが見込まれている。FRB当局内でインフレに対する先行き不透明感が強い中、トランプ大統領の支持率も継続的に低下するなど政権不安等からドルの上値が重くなっていることに加え、ECBによるテーパリング観測等からユーロ高ドル安も進行している状況。ドル人民元については引き続き当局から人民元安を抑える介入のような動きも散見されている中、当局者の発言からも安定的な水準を維持するというような発言が見られる。少なくとも秋の共産党大会までは相場安定を目指していることが垣間見えることから、ドル人民元の相場レンジは6.65-6.95近辺で推移か。中期的には、米中通商関係の冷え込みや海外への資本流出懸念等から引き続きドル高人民元安が進んでいくと想定。

#### 【金利市場】

市場流動性が維持されている中、月初は月末を越えたことにより資金需要も落ち着き、7月後半に金利上昇していた1週間物等の短期ゾーンのターム物も一旦は金利低下しやすい地合いか。金利低下が続いていた1か月超のターム物については、低下幅も徐々に落ちてきており、水準的にも一旦は中立的な位置か。月後半にかけては再び月末越えのターム物が意識されることから、次第に資金需要が高まる展開を想定しているが、引き続きPBOCは資金供給量を適宜調整しており、大幅な金利変動は抑えられる見込み。

### 今月のつばやき(現地からの声)

#### 『当地の盛んなスポーツ』

某中国メディアによると、ここ中国で最も人気があるのは、バスケットボールのようです。元NBA選手の姚明選手のおかげで、NBAや国内のプロリーグはとて人気があります。日本の某バスケ漫画はとて有名で、みんなが知っています。しかし、最近とて盛り上がってきているスポーツといえば、サッカーではないでしょうか。なぜなら、習近平国家主席は大のサッカー好き。「中国の偉大な復興のためにサッカーの振興が不可欠」というほど。まさに国策としてサッカーを強化しており、2016年4月には中国を「2050年までに世界的なサッカー強国にする」との長期計画を発表。中国人のサッカー参加意識を促し、全土に急速にトレーニングセンターやサッカー場を建設する施策を推進する(2030年までに1万人につき1サッカー場を備える)としました。また、2025年までに全国に「サッカー学校」を5万校建設するなどとした改革プランを策定しており、今既に1万3千校に達し、約240人の外国籍の専門教員を選抜したと言われてます。中国国内のプロリーグにおいても、海外の有名選手を数々招致して注目を集めていますし、本田選手が所属していたACミランや、長友選手がいるインテルなどの海外の有名クラブを買収するなど、近年より存在感が増してきています。習国家主席のサッカーで世界一になる夢、実現するのでしょうか。

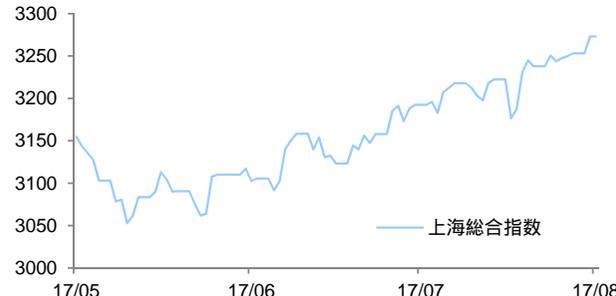
### 為替の動き

(資料)ブルームバーグ



### 株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



### 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/13	貿易収支(RMB建)	6月	275.1B	294.3B	281.6B
7/13	輸出(RMB建)(前年比)	6月	14.6%	17.3%	15.5%
7/13	輸入(RMB建)(前年比)	6月	22.3%	23.1%	22.1%
7/10	CPI(前年比)	6月	1.6%	1.5%	1.5%
7/10	PPI(前年比)	6月	5.5%	5.5%	5.5%

(資料)ブルームバーグ

# シンガポールドル相場

予想レンジ: USD/SGD 1.3450 ~ 1.3700  
SGD/JPY 81.00 ~ 82.50

アジア・オセアニア資金部 鈴木 教子

## 先月の為替相場

7月のシンガポールドル(SGD)相場は、SGDが10か月ぶり高値を更新。月初の3日、米6月ISM製造業景況指数が予想を大きく上回ったことを受けて、オープンレベルの1.37台前半から1.38台前半まで下落。その後は、米6月雇用統計を控えて1.38台前半の狭いレンジ内での取引が続いた。7日に発表された米6月雇用統計は、非農業部門雇用者数が予想を大きく上回ったが、インフレ要因として注目されている平均時給の伸びは予想を下回り、方向感をはっきりしないまま越した。

第2週は、約2か月ぶりの安値まで円安が進んだ影響で、SGDも10日に1.38台後半へ続落したが、結果的にはそれが月中の安値となった。11日の海外市場で、米トランプ政権とロシアの共謀疑惑が浮上したことや、ブレitbart FRB理事が「利上げ決定前にインフレを見極めたい」と追加利上げに慎重な姿勢を示したことを受けてドルが急反落すると、SGDにも買戻しが入った。更に12日、イエレンFRB議長が議会証言で「大幅な利上げが必要な訳ではない」と述べ、米利上げペースが緩やかになる可能性が示されたことを受けて米ドル金利が大幅低下。米ドル金利の低下基調はその後第3週末まで継続し、ドル売りの流れのペースとなった。14日には、シンガポール4~6月期GDP速報値が発表され、前期から改善したものの市場予想には届かなかったため、SGDは小幅反落したが、同夜に米7月ミシガン大学消費者信頼感指数、6月小売売上高、6月消費者物価指数(CPI)が軒並み予想を下回ったことで、1.37台前半までSGDが反発して引けた。

第3週も米ドル金利低下を背景にドル安基調が続き、SGDが堅調推移。ECBによる金融緩和縮小を期待したユーロ買いや、豪州準備銀行による楽観的な経済見通しを受けた豪ドル買いが主導して、アジア通貨も全面高となる中、SGDも6月につけた高値を抜いて1.36台後半へ続伸した。更に週後半には、トランプ米大統領のビジネスに関する取引が捜査対象に加えられたことや、スパイサー米大統領報道官の辞任を受けてトランプ政権に対する不透明感が強まり、SGDは1.36台前半まで買われた。

第4週は、26日のFOMCを控えた調整で一般的にドルが反発し、SGDも週前半は上値重く推移したが、FOMCの声明文の中のインフレに関する表現がややハト派的だったことを受けてドルが全面安となると、SGDは27日に1.35台後半まで続伸し10か月ぶり高値を更新した。

## 今月の見通し

8月のシンガポールドル(SGD)相場は、SGD高バイアス含みで持ち合いを予想。

シンガポール国内要因を見ると、輸出が予想以上に底堅く、4~6月期GDPはプラス成長となった。一方でインフレは落ち着いており、シンガポール金融管理局(MAS)は10月の定例見直しにおいても現状の中立スタンスを継続するとの見方が増えている。よって、SGD相場は引き続きドル自体の方向感に沿った動きになると思われる。

ドルのトレンドとしては、市場参加者がドル安材料により敏感に反応する傾向が見られ、7月は予想以上にドル安が進んだ。ドルインデックスはすでに米大統領選直前の水準を大きく割り込んでおり、トランプ大統領の政策への期待感で買われた分を帳消しにただけでなく、トランプ政権に対する不安感を背景としたドル売りであることが伺われる。年初より続いているドル安相場の戻りはいずれも長続きせず、また足許の人民元高、ユーロ高には勢いが感じられることから、高値警戒感はあるものの、8月もドル安の流れが継続する可能性がある。

とはいえ、ドルインデックスは2016年5月以来の低水準にあり、2年半に亘る持ち合いの下限にも近いことから、オーバーシュートしたとしてもドル安の余地はあまり大きくなさそうだ。また、8月は夏季休暇に入る市場参加者が多く、米国、欧州、日本とも金融政策決定会合がないため、例年夏枯れ相場となり易い。よって、SGD高バイアス含みの持ち合いを予想する。

注目材料は、シンガポール経済指標は7月輸出統計(17日)、4~6月期GDP速報値(8月下旬)、7月CPI(23日)。国外要因ではジャクソンホールシンポジウム(24~26日)。

## 今月のつづやき(現地からの声)

『当地の盛んなスポーツ』

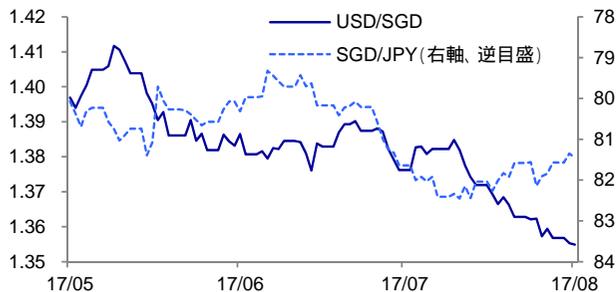
シンガポールで盛んなスポーツ。よくわからなかったので…ストリートに現地職員にヒアリングしてみました。若手A(女性)「学校でやるのはスイミングとかかな」、中堅B(男性)「テレビでもよく見るサッカーでしょ」、中堅C(女性)「バスケットじゃない？ボールとゴールがあれば人数少なくてもできるし」、シニアD「健康にはサイクリングかな」。

皆様、きれいにばらばら。いやいや、困りました。多民族国家ということもあり、中国の影響(卓球やバドミントン)やインドの影響(クリケット)があったり、西洋や欧米と同じように若い年代にはサッカーやバスケットも人気があります。一般的に行うスポーツとしては、ランニングやスイミングそしてサイクリングがコストもあまりかからないのでポピュラー。

結論として「みんなと盛り上がるのはサッカー、一般的に行われているのはランニング」かなと。シンガポールにはSリーグというプロサッカーリーグがあり、アルビレックス新潟も参戦中で昨年度はリーグ優勝を果たしており。当でサッカー教室を開催する等、日本人の根強いファンもあり、知名度はなかなか。一方、ランニングは気候のせいも、様々な大会が開催されています。一番有名なのは「シンガポール・マラソン」、イーストコーストの絶景を眺めたり、F1に使用されているコースを走ります。また、現地の金融機関が主催するマラソン大会や駅伝大会も数多くあり、シンガポリアンの方々はこちらで参加している模様です。(鳥場)

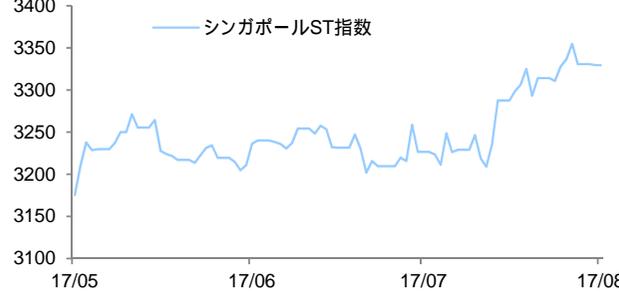
## 為替の動き

(資料)ブルームバーグ



## 株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



## 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/3	購買部景気指数	6月	50.6	50.9	50.8
7/3	電子産業指数	6月	-	52.1	52.4
7/12	小売売上高(前年比)	5月	2.2%	0.9%	2.7%
7/14	GDP速報値(前年比)	2Q	2.7%	2.5%	2.5%
7/17	非石油輸出(前年比)	6月	-4.9%	-2.7%	9.4%
7/24	CPI(前年比)	6月	0.7%	0.5%	1.4%
7/26	鉱工業生産(前年比)	6月	8.5%	13.1%	4.4%

(資料)ブルームバーグ

## タイパーツ相場

予想レンジ: USD/THB 32.80 ~ 33.60  
THB/JPY 3.25 ~ 3.40

バンコック資金室 井上 由貴

### 先月の為替相場

○ドルパーツは2年ぶり安値となる33.20台まで急落  
上旬、ドルパーツは小幅に上昇。月初3日、ドルパーツは33.90近辺で取引を開始。6月消費者物価指数は前年比▲0.05%となり、5月に引き続き前年比マイナス圏に沈んだ。5日に開催されたタイ中銀金融政策委員会(MPC)では全会一致で政策金利1.50%の据え置きが決定された。6日に発表された6月消費者景気信頼感63.3(前回64.3)と前月から低下するも反応は限定的。7日に発表された6月雇用統計では非農業部門雇用者数変化が予想を大きく上回る結果となると米金利が上昇する展開に、34.10台まで上昇した。

中旬、ドルパーツは下落。10日はタイ祝日であったが、先週からのドル選好地合いが継続すると高値となる34.10台半ばまで上昇。しかし11日、海外時間にトランプ大統領の長男にまつわる疑惑や、ブレイナードFRB理事が講演で利上げに慎重な発言を行ったことをきっかけにドルが急落するとドルパーツも34.10付近から34.00付近まで急落。12日には、イエレンFRB議長が議会証言において「インフレの“不確実性”により利上げ余地は限られる可能性がある」と発言したことがハト派と捉えられ、ドルが下落すると、ドルパーツは34.00割れ。その後、14日には米経済指標が弱い結果となり米金利が一段と低下する展開に、ドルパーツは直近安値を割り込んで33.70半ばまで下落。週明け17日以降もドル売り優勢の展開が継続。18日には、米共和党によるオバマケア代替案の採決が頓挫したことが伝わり、ドルパーツは33.50台後半まで下落。下旬、ドルパーツは続落、2年ぶりの安値を更新。20日、ウィラタイ中銀総裁はパーツ高について「米政治リスクがドル安を引き起こしている」「タイパーツは依然として他のアジア通貨と同様の動き」と述べ、明確なパーツ高けん制を行わなかった。同日に商務省が発表した6月貿易統計では輸出が前年比+11.73%のプラスとなり2か月連続の2桁増加であったものの相場の反応は限定的だった。ドルパーツは24日にかけて2年ぶりの安値となる33.40台まで下落した。25日にはマーティ・タイ中銀副総裁がパーツ高進行のスピードについて「最近はやや速すぎる」と発言したが反応は薄く、海外時間に入り、ポジション調整から米金利が反発したことを背景にドルパーツも小幅に反発。25~26日のFOMCでは市場予想通り政策金利が据え置かれ、声明文がハト派と捉えられたことからドル安の展開に33.30台まで下落。連休を挟んで月末の31日には輸出企業のパーツ買需要に押されるかたちで33.20台まで値を下げた。

### 今月の見通し

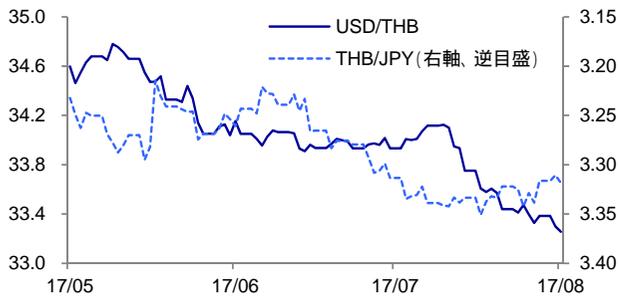
○ドルパーツは続落、33割れが視野に。  
パーツ高が継続している。7月5日に行われたタイ中銀金融政策委員会では、前回同様、全会一致で政策金利1.50%の据え置きが決定された。声明文では、好調な輸出を背景として2017年のGDP見通しを従来の3.4%から3.5%に上方修正した一方、インフレ率の見通しに関しては従来の1.2%から0.8%に下方修正している。6月消費者物価指数が2か月連続で前年比マイナス圏に沈むなど、インフレ率の低迷は明らか。米国が断続的に利上げを継続していること、輸出が好調であることを考えればタイ中銀も利上げステージに入ってもよい気もするが、インフレ率の状況を勘案、中銀は当面の間利上げに踏み切ることはできずしばらく政策金利を据え置くと見られている。数字上好調な輸出と同時に、積み上がる貿易黒字はパーツ高のサポート要因になっている。年初来の対ドルでの通貨騰落率を見ると、年初来で8%近く上昇しているタイパーツはアジア域内でも最強通貨と言ってよい状況にある。確実に輸出競争力を落としていると考えられるが、中銀、政府等からは目立ったパーツ高けん制発言は見られない。20日には、ウィラタイ中銀総裁がパーツ高について「米政治リスクがドル安を引き起こしている」「タイパーツは依然として他のアジア通貨と同様の動き」と発言。31日にも足元のパーツ高に関して「貿易の競争力を損ねておらず、今年の5%輸出増加目標達成に自信を持っている」との発言をおこなっている。  
27日には米ムニューシン米財務長官の「為替操作国には実質的な処置が必要だろう」と発言するなど、重要な貿易相手国である米国の目が気になるというものもあるであろう。このところ中銀の強烈的な為替介入も見られず、市場参加者も中銀による介入を期待しなくなっているのかもしれない。積み上がる経常黒字、上がらない物価。中銀による物価見通しは「年後半に向けて緩やかに上昇し、中長期的には目標レンジの中心に近づくと」なっている。様々な要素が日本、日銀の苦悩と似た状況に陥っているように感じられてならない。極端に米金利上昇、ドル高が進行する場面ではパーツ売りドル買いの局面もあるかもしれないが、パーツ高進行のスピードを調整する役割が少なく、基本的にはパーツ高が継続するものとみる。

### 今月のつばやき(現地からの声)

『当地の盛んなスポーツ』  
タイで人気のあるスポーツって何？とスタッフに聞いて回りました。「ムエタイ」という回答を勝手に期待していましたが、期待には応えてもらえず。バドミントンやサッカー、若い人には特にランニングが人気だそう。確かに、バンコク市内のみならず、パタヤやスコタイといった観光地でもマラソン大会が開催されて人気を集めているようだし、ランニング人口は多いのかもしれない。  
また、自動車産業をはじめとして日系企業の工場が多く集まるタイでは、大きな工場になると従業員の福利厚生の一環として敷地内にスポーツ施設を整えているケースが多くあります。サッカー場やバスケットボールコート、バレーボールコートやジムなどなど。(スポーツと関係ありませんがタイ人の大好きなカラオケルームも。)従業員の方々は業務終了後にジムで軽く汗を流して帰ることもあるとか。さながら東京のお洒落OLのようですね。  
わがみずほ銀行バンコック支店、スポーツ施設はございません。私はというとディーリングルームのある33Fからバックオフィスのある35Fまで社内の階段を駆け上がり、息切れ。2-3往復でもしようものなら軽く翌日筋肉痛。深刻な運動不足でございます。

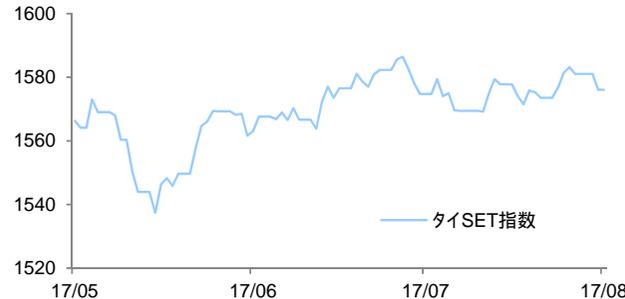
### 為替の動き

(資料)ブルームバーグ



### 株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



### 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/3	消費者物価指数(前年比)	6月	0.00%	-0.05%	-0.04%
7/3	CPIコア(前年比)	6月	0.44%	0.45%	0.46%
7/5	政策金利	-	1.50%	1.50%	1.50%
7/6	消費者景気信頼感	6月	-	63.3	64.3
7/20	輸出(通関ベース/前年比)	6月	8.20%	11.73%	12.70%
7/20	輸入(通関ベース/前年比)	6月	11.20%	13.74%	18.35%
7/20	貿易収支(通関ベース)	6月	\$1500M	\$1917M	\$944M
7/24	自動車販売台数	6月	-	69,798	66,422
7/31	経常収支	6月	\$2550M	\$4283M	\$1130M

(資料)ブルームバーグ

## マレーシアリング相場

予想レンジ: **USD/MYR 4.2400 ~ 4.3100**  
**MYR/JPY 25.06 ~ 26.88**  
**JPY/MYR 3.7200 ~ 3.9900** (100円あたり)

マレーシアみずほ銀行 山田 輝彦

### 先月の為替相場

7月のリングgitは値幅は限られる中、ややリングgit高が進む展開。

7月前半は4.29台半ばで取引が始まると、4日が米国祝日ということもあって閑散とする中、4.29台半ばでの狭いレンジ内での動きが続いた。4日以降も同様にほぼ動かず、5日海外時間で6月のOPEC原油産出量が増加したことやロシアが原油減産幅拡大に慎重との報道に原油価格が急落する動き等もリングgitは特段の反応を見せることはなかった。そのまま7日夜に予定されている6月米雇用統計を前に相場の膠着感が一段と強まる中、結局4.29台後半で取引を終えた。

中旬のリングgitは、7日に発表された6月米雇用統計で平均時給の伸びは事前予想を下回ったものの、非農業雇用者数が事前予想を上回ったことが材料視され対主要通貨でドル高が進んだ動きにも反応は鈍く、引続き4.29台での取引に終始。その後も米国時間11日のトランプ政権とロシアの共謀疑惑や12日のハト派的なイエレンFRB議長の議会証言を受けたドル売りの流れにリングgitも一時は4.29ちょうどを割り込んだが、リングgit高は続かず結局4.29台前半で取引を終了した。また13日にはマレーシア中銀の金融政策決定会合で金利据え置きが発表されたが、市場へのインパクトはほぼなかった。

下旬にかけては14日に発表された米国の6月小売売上高、6月消費者物価共に事前予想を下回る内容であったことを受け、4.28台半ばまでリングgit高が進んだが、対主要通貨でドル売りが進む動きがある中、一段と買い進む動きとはならず先週同様に値幅乏しく4.28台後半での取引となった。翌日以降も同レベルでの緩慢な動きが続き、注目されていた20日のECB理事会でのタカ派的なドラギ総裁の発言を受けてユーロが急進する動きにも21日のリングgitは特段の反応を示さなかったが、米国での政治リスクの高まりにドル売り圧力が強まったことで、リングgitは24日に4.2770を付けた。しかし、現地時間25日に米国で良好な経済指標が発表されたことや上院でヘルスケア代替法案動議が可決されたことを受けドル買いとなったことで、26日のリングgitは再び4.28台での取引となった。

### 今月の見通し

8月も引続き基調としては国内の好調な経済を背景にリングgit高優勢の展開を予想するが、値幅は限られそうだ。

7月は前半が4.29~4.30、後半が4.28~4.29を中心とするかなり狭いレンジ内での取引とはなかったが、リングgit高方向に水準を切り下げた。

リングgitは昨年11月のトランプ氏が大統領選に勝利して以降、外国人投資家が保有しているマレーシア債券を今年3月まで売り越しており、その動きがリングgit安に影響していたと見ているが、4月、5月と買い越しに転じたことでリングgitも4.4台から4.3を割れる水準まで買い戻された。しかし6月以降は再び売り越しに転じており、結果としてリングgitは4.25~4.3のレンジ取引入りしてしまったと思われる。

相場の材料としては米国金融政策動向と米国政治動向に尽きるが、先月はここにドラギECB総裁の「デフレ圧力はリフレ圧力に置き換わった」との発言に端を発した欧州金融政策正常化への思惑も加わったと考えられ、リングgitが一段と買われていくには今暫く時間を要するのではないかと。

また7月13日の金融政策決定会合では事前予想通り政策金利は据え置かれ、その後発表された声明文でも大きな文言の変更はなかった。非常に良好な第1四半期GDPが発表されて以降、政府、中銀は依然として今年のGDP見通しを4.2%~4.8%で据え置いているが、一部証券会社や或いはIMFはそれ以上にGDP見通しを引き上げている。原油価格次第のところはあるが、消費者物価指数が落ち着きを見せてきている状況下、マレーシアでの利上げ議論が急速に高まる可能性は現状低いと考えるが、8月18日に発表が予定されている第2四半期GDPが強い結果であった場合には年明け早々に利上げという期待感が出てくる可能性は否定できない。

海外要因を踏まえればリングgitが一本調子に買われていきそうにはないが、国内経済が好調を維持していることが確認されれば緩やかにリングgit高が進行していくのではないかと。

### 今月のつづやき(現地からの声)

『当地の盛んなスポーツ』  
 当地で盛んなスポーツといえば、ゴルフ、バドミントン、サッカーではないでしょうか。

#### ゴルフ

マレーシアは政府がゴルフ立国を目指しており、ゴルフ道具やバギー輸入に関税をにかけていないということ、クアラルンプールを例に挙げると市内から1時間以内に40ほどのゴルフ場があり、パブリックであれば週末でも200リングgit台でラウンドできる等、比較的ポピュラーなスポーツです。ゴルフ場にもよりますが、マレー系の人を見掛けることもよくあります。ナジブ首相が普通にKLCC伊勢丹のゴルフコーナーでパターを真剣に選んでいたという目撃情報もあつたりします。

#### バドミントン

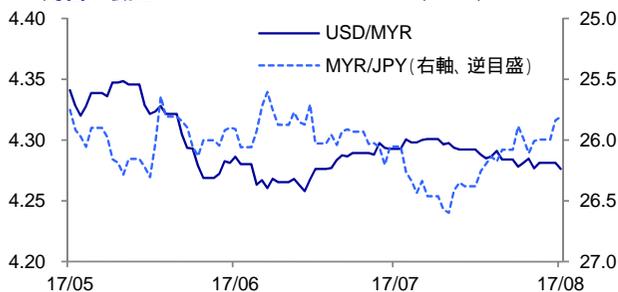
この前のリオデジャネイロオリンピックで銀メダルを獲得したようにバドミントンはかなりの強豪です。私のいる資金課でもバドミントンに興じているスタッフは結構います。一方でテニスはあまりメジャーではなさそうです。

#### サッカー

意外と知られていませんがマレーシアにもプロリーグがあります。ただ人気なのはやはりプレミアリーグを筆頭とする欧州サッカーで、お気に入りのチームがある人も結構いるようです。また11人サッカーは定かではありませんが、フットサルは盛んで当拠点でも定期的に課対抗戦をやつたりしています。意外と言うと怒られてしましますが、結構上手いナショナルスタッフが多いです。

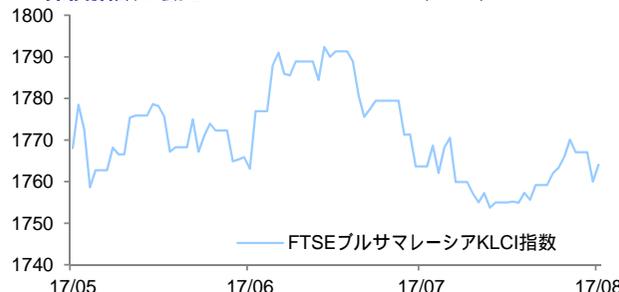
### 為替の動き

(資料) ブルームバーク



### 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



### 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/7	輸出(前年比)	5月	23.4%	32.5%	20.4%
7/7	輸入(前年比)	5月	19.4%	30.4%	24.7%
7/7	貿易収支(MYR)	5月	6.89B	5.49B	8.66B
7/7	外貨準備高(米ドル)	6/30	-	98.9B	98.7B
7/12	鉱工業生産(前年比)	5月	4.1%	4.6%	4.2%
7/12	製造業売上(前年比)	5月	-	19.5%	15.6%
7/13	金融政策会合		3.0%	3.0%	3.0%
7/19	消費者物価(前年比)	6月	4.1%	3.9%	4.4%
7/19	外貨準備高(米ドル)	7/14	-	99.1B	98.7B

## インドネシアルピア相場

予想レンジ:

USD/IDR 13100 ~ 13500  
 IDR/JPY 0.81 ~ 0.87  
 JPY/IDR 115.00 ~ 123.00

(注)100インドネシアルピアあたりの対円レート

アジア・オセアニア資金部 河合 良介

### 先月の為替相場

7月のドル/ルピアは、13295～13415のレンジでの取引となり、上に往って来いの展開となった。

レバラン(断食明け大祭)明け、13300近辺でスタートしたドル/ルピアは、月前半、ECB理事会議事要旨で、金融緩和縮小への期待が高まり、独国債利回りが1年半ぶりの高水準へ上昇するなど世界的な金利上昇を受けて、海外投資家の資金流出から一時13415近辺まで上昇した。この間、インドネシア国債利回りは、6.8%近辺から7.2%まで急騰した。3日発表されたインドネシア6月消費者物価指数(CPI)は、前年同月比+4.37%上昇と、断食月としては比較的安定した水準に収まり、7日発表されたインドネシア6月外貨準備高が、昨年11月以来7か月ぶりの減少となったが相場への影響は限定的であった。また、ジャカルタ株価総合指数は、7月3日に5,910.237と過去最高値を更新している。

月半ば以降、海外投資家による資金流出に一服感が出ると、ドル/ルピアは反落し、19日には一時13295をつけた。17日発表された6月貿易収支が、輸出が前年比▲11.82%の減少となったが、輸入が同▲17.21%の減少となったことを受け、予想以上の黒字(実績:+16億ドル、予想:+6億ドル、前回:+6億ドル)となったこともドル/ルピア下落をけん引した。

その後、ドル/ルピアは、動意なく推移し、13310近辺の取引となっている(7月24日終値)。

19・20日に行われたインドネシア中央銀行(BI)の月例会合では、国内外の経済情勢を踏まえて、9か月連続で政策金利を据え置いた。

### 今月の見通し

今月のドル/ルピアは、引き続き、ルピア堅調地合いの中、メインシナリオとして、13200～13400をコアレンジとした狭いレンジ取引を予想する。

今月は、インドネシア国内にて、①4～6月期GDP②4～6月期経常収支が発表となる。①については、前年比で+5%が維持できるか、②については、前回同様経常赤字額が▲25億ドル近辺に収まるかに注目している。

CPIについては、断食月を通過し、+3%台へ落ち着くのではないかと、また、昨年11月以来の減少となったインドネシア外貨準備高については、政府関係者からは強気のコメントが出ており、反転増加になるとみている。

上記のように経済指標に大きなネガティブサプライズは想定しておらず、先月、世界的な金利上昇を背景に一時上昇したドル/ルピアだが、影響は限定的となり、海外からの資金流入は回復。根強いインドネシア買い需要が確認される格好となっただけに、引き続きルピアが対ドルで堅調な地合いが継続しそうだ。

### 今月のつづやき(現地からの声)

『当地の盛んなスポーツ』

インドネシアで盛んなスポーツと言えば、まず「バドミントン」が挙げられるだろう。

我々世代であれば、「キャッチボール」、ちょっと若い世代だと「サッカー」という具合に、浸透しているようだ。

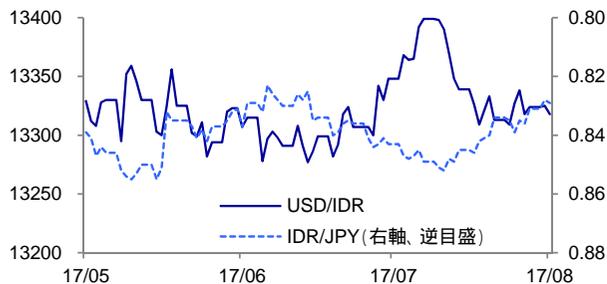
あるインドネシア人の知人に、「先週末、何やってたの?」と聞くと、「暇だったから、お父さんとバドミントンやっていた。」と。家族で楽しめる国民的スポーツのようです。

また、サッカーも非常に人気があります。市内最大の競技場でサッカーの公式戦があると、普段からひどい渋滞は、更にひどくなります。

日本のJリーグのチームがインドネシアのクラブチームと親善試合をしに来た時のこと。我々家族も観戦にいったのですが、Jリーグのチームが優勢で楽しく見ていたのですが、差が開き出すに連れ、ジャカルタチームのサポーターが発煙筒に火をつけ始めたので、怖くなり、家族一同、退散しました。

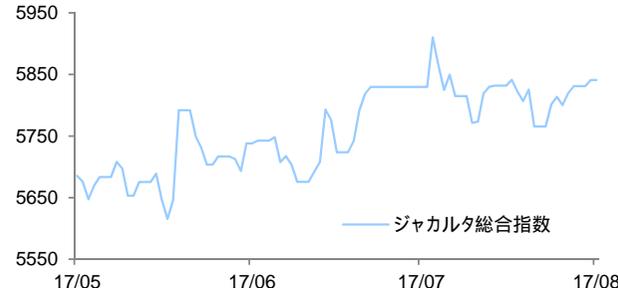
### 為替の動き

(資料)ブルームバーグ



### 株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



### 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/3	CPI(前年同月比)	6月	4.29%	4.37%	4.33%
7/7	外貨準備高(USD B)	6月	-	123.1	125.0
7/17	輸出(前年比)	6月	7.28%	-11.82%	24.55%
7/17	貿易収支(USD M)	6月	605	1,631	474
7/21	BI 7daysリバースレボ金利		4.75%	4.75%	4.75%

(資料)ブルームバーグ

## フィリピンペソ相場

予想レンジ: USD/PHP 50.00 ~ 51.15  
 PHP/JPY 2.18 ~ 2.24

マニラ支店 樋上 陽一

### 先月の為替相場

7月のドルペソ為替相場は1ドル=50.45ペソで取引開始。5日に発表された比6月消費者物価(前年同月比)は2.8%となり、前月の3.1%から低下、年初に高まった利上げ期待はいよいよトーンダウン。

FOMCの6月会合議事要旨では、FRBのバランスシート縮小開始時期で意見が分かれ、明確なタイムラインが示されなかったものの、ドル金利とペソ金利のファンダメンタルズの違いは明白、と考える市場参加者が多く、ドルペソ為替相場は、6日には一時1米ドル=50.70ペソ手前までペソ安が進んだ。

米6月雇用統計(7日)は強弱入り混じる内容だったが発表後の米金利、米株は底固く推移。為替市場はドル買いとなり、週明けのドルペソ為替相場はドル買いのバイアスが強まっており、11日に発表された比5月貿易収支は27.5億ドルの赤字となり、前月の17.5億ドルの赤字から大きく拡大したことが嫌気され、一時1ドル=50.87ペソまでペソは売られた。その後、ドルペソの中銀の介入と思しきドル売りに相場は1ドル=50.50~60ペソレベルまで押し戻され、米大統領選でのロシア干渉問題、イエレンFRB議長がインフレの先行きに対して不透明感を示すと相場は方向感を失い、14日(金)は1米ドル=50.65ペソで越週。

週明け17日は、前週金曜日の米国時間に発表された米6月消費者物価、小売売上高の数字が悪く、アジア通貨が対ドルで強含んでいたことからドル高に不服感が広がるかと思われた。しかしながら、19日に発表された比6月総合国際収支が5.7億ドルの赤字(5月は0.6億ドルの赤字、4月9.2億ドルの黒字)となり、ペソ安を防衛する中銀の動きも見られなかったことからペソ売りが加速し、一時1米ドル=50.95ペソで取引された。

7月は2006年以來のペソ安値を更新してきたものの、月末にかけてはポジション調整のペソ買い戻しフローや、実需の大口ペソ買いフローもあり、加えてFOMC(26日)後のハト派トーンでドル買いに不服感が漂った。27日のオンショアクローズは1ドル=50.56。

### 今月の見通し

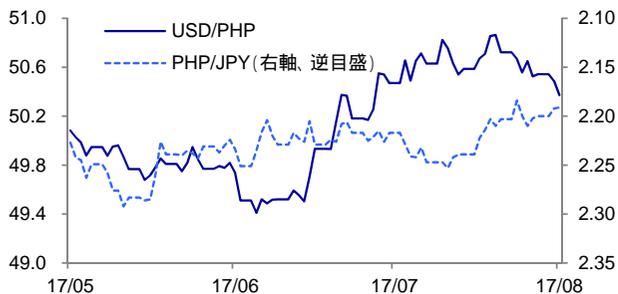
今後のドルペソ為替相場だが、短期的にはドル買いトレンドに懐疑的な見方がでもおかしくはないと思われる。まずは当局のスタンスだが、フィリピン中銀エスピーニャ総裁は、「最近のドルペソの動きは、ドルの金融政策を反映したもので、中銀が想定している動きから逸脱していない」、との見方を示した。インプリケーションとしては、為替介入で過度なペソ安は抑えるものの、現在のドル高ペソ安トレンドを認めたように思われる。確かに年初からのドルペソの高値と安値のレンジは1.5ペソで、16年の4ペソ、15年の3.3ペソと比べれば変動はまだ小さいといえる。

しかしながら、ドル長期金利(10年債)は7月に入ってから低下しており、米金利の先高観に対する期待が剥落する可能性はある。また、フィリピン株式相場に注目すると世界的な株高の流れの中で、出遅れ感があるようにみえる。6月末からの外国人投資家のフィリピン株売買動向(週次)は拮抗しており、再び買い越しフィリピン買いのトレンドが再開となればペソ買いを誘因しそうだ。

一方、比6月総合国際収支は赤字幅が拡大し、17年上期の累計は7.1億ドルの赤字となった。前年同期が6.3億ドルの黒字だったことを考えると資金流出は顕著。今年に入ってから、月次貿易赤字が過去最大を更新していることからある程度予想しうる数字だったが、今後もフィリピン経済が拡大する中で貿易赤字は拡大傾向が予想され、収支の黒字要因であるOFW、BPO産業に絡む資金流入の寄与度が今後を占う上でますます注目される。OFW送金額は原油価格次第で回復する可能性はあるが、漸減傾向を予想、BPO産業はトランプの保護主義政策を考えると大きな拡大は見込まれそうにない。中期的にはいよいよ1ドル=52ペソ台が視野に入ってきた、といっても言い過ぎではないと思われる。

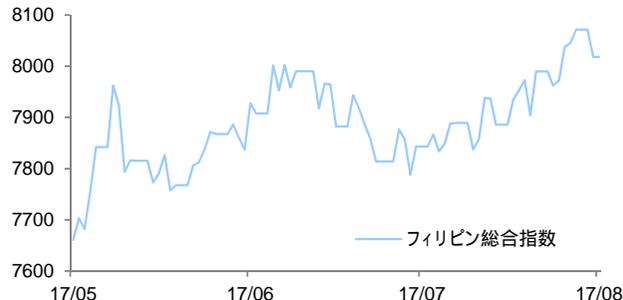
為替の動き

(資料)ブルームバーグ



株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



先月の注目イベント

発表日 イベント  
 上記ご参照

(資料)ブルームバーグ

期間 予想 結果 前回

# インドルピー相場

予想レンジ: USD/INR 63.90 ~ 65.00  
INR/JPY 1.67 ~ 1.77

アジア・オセアニア資金部 田川 順也

## 先月の為替相場

【7月の米ドル/インドルピーは軟調な推移となった】

64.67レベルで7月の取引を開始。月初揉み合当中で当月の高値(ドル高/ルピー安)となる64.90をつける。底堅い米経済指標にドルが確りする展開に加え、北朝鮮がミサイル発射したとの報道を受け、新興国が全般的に軟調となる中でドル/ルピーも64.80レベルを挟んでの展開が続く。ただ、6月にもたつきを見せていたインド株式が上抜けるとルピー買いが先行、10日には64.50を割り込む。

その後もインド株式は断続的に史上最高値を更新、インドの消費者物価指数が芳しくない内容となると利下げ期待から債券に対しても資金が流入し、一段とインドルピーが買われる展開。19日には当月の安値(ドル安/ルピー高)である64.28割れを示現。

ただし、国内輸入勢からの実需ルピー売りも観測される中、当局のスムージングオペレーションの噂も聞かれ、一段の下値追いとはならず、やや水準を戻し、64.37レベルで26日のクローズを迎えた。

【7月のインドルピー/円は上昇後に下落した】

ルピー/円は1.736レベルでオープン。月半ばにかけては良好な米雇用統計等に支援され、ドル円が114円台半ばを試しに行く動きを横目にルピー/円も当月の高値である1.775レベルまで上伸。ただし、その後は燻るロシアゲート問題やFRB理事がハト派とも受け取れる発言をすることでドル円の上昇が停止。

月後半以降は米利上げペースに対して懐疑的な見方が先行するとともに日銀が物価目標達成次期を先延ばしを決定する等、ドル安・円高支援材料が出る中で断続的にドル/円が切り下がり111円台を割り込んだタイミングでルピー/円は当月の安値となる1.718レベルまで売られる。27日執筆時点で1.730辺りでの推移となっている。非常にドル円相場との連動性が高い月であった。

## 今月の見通し

【8月の米ドル/インドルピーは方向感の出づらいつ展開を予想】

インドへの投資資金流入が止まらない状況で、海外投資家勢がインドの株式を買う、債券を買うためインドルピーが買われ、結局ルピー高方向の圧力を生むという図式になっている。直近の選挙でも現首相の盤石さが確認されたが、先月はGST施行後の世論調査で過半が本策を支持していることが知られた。欧米の投資家間では第二次安倍政権発足時と同じ程度の期待がかかっているとの話も聞かれており、当月も基本的に海外からインドへのインフローが続くことになろう。

8月RBI会合にて政策金利の引き下げられる可能性があるが、この場合も株買い・債券買いが先行することが想定され、教科書的にルピーが売られるというよりはむしろルピー高方向を考えておきたい。

一方で4月、5月の本欄で触れたようにRBIによるルピー高阻止が耳目を集めている。実効レートベースで見たインドルピーは2011年以来の高水準となっており、ルピー高の影響をRBIが懸念していてもおかしくないレベルである。

総じて、行き過ぎたルピー高/ルピー安ともに考えづらくレンジ相場を想定しておきたい。

米国サイドでは左記のようにそもそも利上げに対して懐疑的な意見がされていた中、7月末のFOMCにて足元にインフレについて弱気な文言が確認されると一段のドル売りとなり、ドル/円は111円台割り込み、ユーロ/ドルは2年半ぶり水準までユーロ高/ドル安が進行している。米ドルは上値の重い展開が想定されるが既述の通り過度にルピー高になることも想定しづらい。

## 今月のつづやき(現地からの声)

『当地の盛んなスポーツ』

インドで盛んなスポーツと言えば「クリケット」だろう。日本ではあまりなじみがないかと思う。かくいう私も「不思議の国のアリス」でハートの女王とアリスがフラミンゴとハリネズミを使ってやってたようなというくらいで、どのようなスポーツか全くわからなかった。

簡単に説明すると、1チーム11名の2チームによりフィールド上でバットとボールを用いて行う競技である。

一見して野球のような球技に思えるが、バットがポートのオールのような形状をしていたり、ウィケットと呼ばれる3本の棒にボールが当たったら負けとか、投げるボールはワンバウンドでもいい等野球と異なるルールが多くある。クリケットに対する熱狂は想像以上のもので、タクシーに乗った時「今日はクリケットの国際試合があるのだ」と運転手。だから道も空いているでしょうか。つまり皆テレビに釘付けで家の中にいるらしい。

そんな大事な時に呼んじやってごめんさいと言うと、「大丈夫。ゲームは何時間もかかるから」。

そう、クリケットの特徴のひとつに1日では終わらないというものがある。優雅にティータイムを取りながら、長い場合は4,5日かけて臨む。クリケットは社交なのだ。

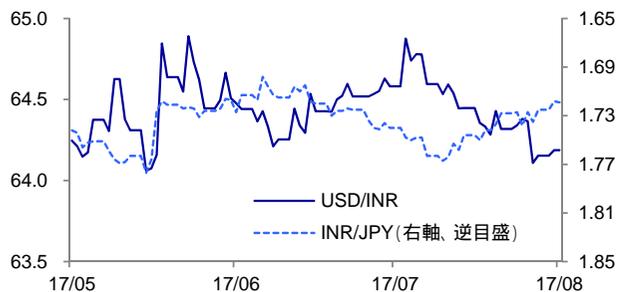
そんなクリケットを題材にしたアニメがある。2012年放送の「スーラジ ザ・ライジングスター」というタイトルで、懐かしのアニメ「巨人の星」のリメイク版。野球をクリケットに置き換えたインド版スポ根アニメである。

もちろん登場人物はインド人であり、舞台はインドのムンバイとなっている。かの「大リーグ養成ギブス」も「ちゃぶ台返し」もインドテイストに変更されて物語に登場するそう。ちょっと興味がある。週末にネットで検索でもしてみようか。

(チェンナイ支店 近藤)

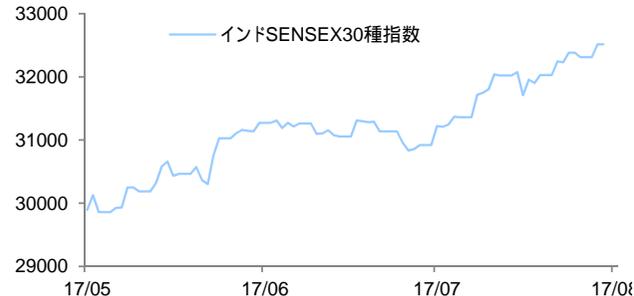
## 為替の動き

(資料) ブルームバーク



## 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



## 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

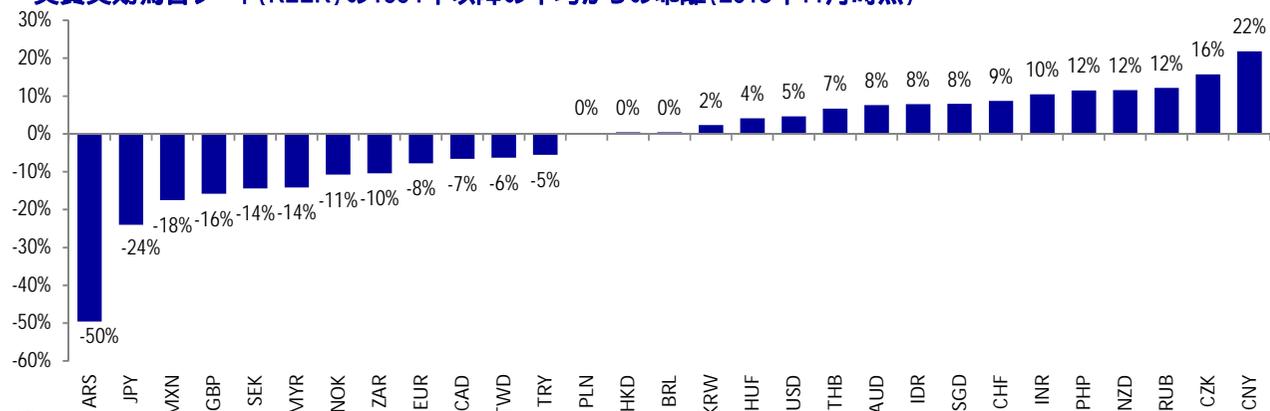
発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
7/3	日経インドPMI製造業	6月	-	50.9	51.6
7/5	日経インドPMIサービス業	6月	-	53.1	52.2
7/12	鉱工業生産(前年比)	5月	2.00%	1.70%	2.80%
7/12	消費者物価指数(前年比)	6月	1.60%	1.54%	2.18%
7/14	輸出(前年比)	6月	-	4.4%	8.3%
7/14	輸入(前年比)	6月	-	19.0%	33.1%

### 為替市場・株式市場騰落率

	為替市場	2016年末	2017年7月末	騰落率	株式市場	2016年末	2017年7月末	騰落率	USD換算
<b>先進国</b>									
米国	-	-	-	-	NYダウ平均	19762.6	21891.12	10.8%	-
日本	USD/JPY	116.96	110.26	-5.7%	日経平均株価	19114.37	19925.18	4.2%	10.6%
ユーロ圏	EUR/USD	1.0517	1.1842	12.6%	ドイツDAX指数	11481.06	12118.25	5.5%	5.5%
英国	GBP/USD	1.234	1.3215	7.1%	ロンドンFTSE100指数	7142.83	7372	3.2%	-3.6%
豪州	AUD/USD	0.7208	0.8003	11.0%	S&P/ASX200指数	5665.8	5720.591	1.0%	-9.1%
カナダ	USD/CAD	1.3441	1.248	-7.1%	S&Pトロント総合指数	15287.59	15143.87	-0.9%	6.7%
<b>エマーシングアジア</b>									
中国	USD/CNY	6.945	6.7266	-3.1%	上海総合	3103.637	3273.028	5.5%	8.9%
香港	USD/HKD	7.7559	7.8102	0.7%	香港ハンセン	22000.56	27323.99	24.2%	23.3%
インド	USD/INR	67.9238	64.1875	-5.5%	インドSENSEX30種	26626.46	32514.94	22.1%	29.2%
インドネシア	USD/IDR	13473	13325	-1.1%	ジャカルタ総合	5296.711	5840.939	10.3%	11.5%
韓国	USD/KRW	1205.83	1119.32	-7.2%	韓国総合株価	2026.46	2402.71	18.6%	27.7%
マレーシア	USD/MYR	4.4862	4.2813	-4.6%	ブルサマレーシアKLCI	1641.73	1760.03	7.2%	12.3%
フィリピン	USD/PHP	49.6	50.487	1.8%	フィリピン総合	6840.64	8018.05	17.2%	15.2%
シンガポール	USD/SGD	1.4468	1.3553	-6.3%	シンガポールST	2880.76	3329.52	15.6%	23.4%
台湾	USD/TWD	32.326	30.213	-6.5%	台湾加権	9253.5	10427.33	12.7%	20.6%
タイ	USD/THB	35.835	33.3	-7.1%	タイSET	1542.94	1576.08	2.1%	9.9%

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

### 実質実効為替レート(REER)の1994年以降の平均からの乖離(2015年11月時点)



(資料) BIS

### 実質GDP成長率

	2015Q4	2016Q1	2016Q2	2016Q3	2016Q4	2017Q1	2017Q2	2015	2016
	(前年比%、*前期比年率%)							(前年比%)	
<b>先進国</b>									
米国*	0.5	0.6	2.2	2.8	1.8	1.2	2.6	2.6	1.6
日本*	-1.0	2.5	1.6	1.0	1.4	1.0		1.1	1.0
ユーロ圏	1.9	1.7	1.7	1.7	1.9	1.9		2.0	1.8
英国	1.7	1.6	1.7	2.0	1.9	2.0	1.7	2.2	1.8
豪州	2.6	2.5	3.1	1.8	2.4	1.7		2.4	2.5
カナダ*	0.5	2.8	-1.4	4.2	2.7	3.7		1.0	1.5
<b>エマージングアジア</b>									
中国	6.8	6.7	6.7	6.7	6.8	6.9	6.9	6.9	6.7
香港	1.9	1.0	1.8	2.0	3.2	4.3		2.4	2.0
インド	7.2	9.1	7.9	7.5	7.0	6.1		8.0	
インドネシア	5.2	4.9	5.2	5.0	4.9	5.0		4.9	5.0
韓国	3.2	2.9	3.4	2.6	2.4	2.9	2.7	2.8	2.8
マレーシア	4.6	4.1	4.0	4.3	4.5	5.6		5.0	4.2
フィリピン	6.7	6.9	7.1	7.1	6.6	6.4		6.1	6.9
シンガポール	1.3	1.9	1.9	1.2	2.9	2.5	2.5	2.0	2.0
台湾	-0.8	-0.2	1.1	2.1	2.8	2.6	2.1	0.7	1.5
タイ	2.7	3.1	3.6	3.2	3.0	3.3		2.9	3.2

(注)インドの年間成長率は会計年度(4~3月)。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

### 失業率

	16/12	17/01	17/02	17/03	17/04	17/05	17/06	2015	2016
	(%)							(%)	
<b>先進国</b>									
米国	4.7	4.8	4.7	4.5	4.4	4.3	4.4	5.3	4.9
日本	3.1	3.0	2.8	2.8	2.8	3.1	2.8	3.4	3.1
ユーロ圏	9.6	9.6	9.5	9.4	9.2	9.2	9.1	10.9	10.0
英国	4.8	4.7	4.7	4.6	4.6	4.5		5.4	4.9
豪州	5.8	5.7	5.9	5.9	5.7	5.6	5.6	6.1	5.7
カナダ	6.9	6.8	6.6	6.7	6.5	6.6	6.5	6.9	7.0
<b>エマージングアジア</b>									
中国	4.0			4.0				4.1	4.0
香港	3.3	3.3	3.3	3.2	3.2	3.2	3.1	3.3	3.4
インドネシア			5.6					6.0	5.6
韓国	3.5	3.6	4.0	3.7	4.0	3.6	3.8	3.6	3.7
マレーシア	3.5	3.5	3.5	3.4	3.4	3.4		3.2	3.5
フィリピン		6.6			5.7			6.3	5.5
シンガポール	2.2			2.2			2.2	1.9	2.1
台湾	3.8	3.8	3.8	3.8	3.8	3.8	3.8	3.8	3.9
タイ	0.8	1.2	1.1	1.3	1.3	1.3	1.1	0.9	1.0

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

### 消費者物価上昇率

	17/01	17/02	17/03	17/04	17/05	17/06	17/07	2015	2016
	(前年比%)							(前年比%)	
<b>先進国</b>									
米国	2.5	2.7	2.4	2.2	1.9	1.6		0.1	1.3
日本	0.4	0.3	0.2	0.4	0.4	0.4		0.8	-0.1
ユーロ圏	1.8	2.0	1.5	1.9	1.4	1.3	1.3	0.0	0.2
英国	1.8	2.3	2.3	2.7	2.9	2.6		0.0	0.7
豪州			2.1			1.9		1.5	1.3
カナダ	2.1	2.0	1.6	1.6	1.3	1.0		1.1	1.4
<b>エマージングアジア</b>									
中国	2.5	0.8	0.9	1.2	1.5	1.5		1.4	2.0
香港	1.3	-0.1	0.5	2.0	2.0	1.9		3.0	2.4
インド	3.2	3.7	3.9	3.0	2.2	1.5		5.9	5.0
インドネシア	3.5	3.8	3.6	4.2	4.3	4.4		6.4	3.5
韓国	2.0	1.9	2.2	1.9	2.0	1.9	2.2	0.7	1.3
マレーシア	3.2	4.5	5.1	4.4	3.9	3.6		2.1	2.1
フィリピン	2.7	3.3	3.4	3.4	3.1	2.8		1.4	1.8
シンガポール	0.6	0.7	0.7	0.4	1.4	0.5		-0.5	-0.5
台湾	2.2	-0.1	0.2	0.1	0.6	1.0		-0.3	1.4
タイ	1.6	1.4	0.8	0.4	0.0	-0.1		-0.9	0.2

(注)豪州は四半期データ。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

### 経常収支

	2015Q3	2015Q4	2016Q1	2016Q2	2016Q3	2016Q4	2017Q1	2015	2016
	(対GDP比%)							(対GDP比%)	
<b>先進国</b>									
米国	-2.4	-2.4	-2.4	-2.4	-2.4	-2.4	-2.4	-2.4	-2.4
日本	2.8	3.1	3.4	3.5	3.6	3.8	3.8	3.1	3.8
ユーロ圏	3.2	3.2	3.3	3.6	3.6	3.5	3.5	3.2	3.5
英国	-4.3	-4.3	-4.5	-4.7	-5.1	-4.4	-3.9	-4.3	-4.4
豪州	-5.0	-5.6	-3.5	-3.8	-2.6	-0.8	-0.7	-4.7	-2.7
カナダ	-3.3	-3.4	-3.4	-3.5	-3.6	-3.3	-3.1	-3.4	-3.3
<b>エマージングアジア</b>									
中国	2.7	2.8	2.5	2.4	2.4	1.8	1.5	2.8	1.8
香港	3.2	3.3	3.9	4.5	4.3	4.6	4.6	3.3	4.6
インド	-1.1	-1.1	-1.1	-0.8	-0.5	-0.6	-0.7	-1.1	-0.6
インドネシア	-2.2	-2.1	-2.1	-2.1	-2.1	-1.8	-1.5	-2.1	-1.8
韓国	7.6	7.7	7.9	7.9	7.2	7.0	6.4	7.7	7.0
マレーシア	2.5	2.9	2.4	1.9	1.9	2.1	2.0	2.9	2.1
フィリピン	3.3	2.5	2.1	1.1	1.0	0.2	-0.2	2.5	0.2
シンガポール	18.9	18.1	17.2	18.8	19.5	19.0	19.7	18.1	19.0
台湾	14.1	14.4	14.1	14.3	13.7	13.5	12.7	14.4	13.5
タイ	7.2	8.1	10.2	11.1	12.2	11.7	10.9	8.1	11.4

(注)インドの年間経常収支は会計年度(4~3月)。

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

## 世界の政策金利

		現在 (%)	政策転換期		最近の政策変更		直近の政策動向		
			日付	水準 (%)	日付	(単位:bp)	日付	決定事項	
<b>先進国</b>									
米国	FFレート誘導目標	1.00 - 1.25	引き締め: 2015/12/17	0.25 - 0.50	2017/6/14	25	2017/7/26	現状維持	
日本	無担保コール翌日物金利	0.10	緩和: 2008/10/30	0.50	2010/10/5	0-10	2017/7/20	現状維持	
ユーロ圏	主要リファイナンスオペ金利	0.00	緩和: 2011/11/3	1.50	2016/3/10	-5	2017/7/20	現状維持	
英国	バンク・レート	0.25	緩和: 2007/12/6	5.75	2016/8/4	-25	2017/6/15	現状維持	
豪州	キャッシュ・レート	1.50	緩和: 2011/11/1	4.75	2015/8/2	-25	2017/7/4	現状維持	
カナダ	翌日物金利	0.75	引き締め: 2017/7/12	0.50	2017/7/12	+25	2017/7/12	+25bp	
<b>エマージングアジア</b>									
中国	1年物貸出基準金利	4.35	緩和: 2012/6/8	6.31	2015/8/25	-25	2015/10/23	-25bp	
インド	翌日物レポ金利	6.25	緩和: 2015/1/15	8.00	2016/10/4	-25	2017/6/7	現状維持	
インドネシア	7日物リバースレポレート	4.75	緩和: 2015/2/17	7.75	2016/10/20	-25	2017/7/20	現状維持	
韓国	7日物レポ金利	1.25	緩和: 2012/7/12	3.00	2015/6/9	-25	2017/7/13	現状維持	
マレーシア	翌日物金利	3.00	緩和: 2016/7/13	3.00	2016/7/13	-25	2017/7/13	現状維持	
フィリピン	翌日物金利	3.00	緩和: 2016/5/16	3.00	2016/5/16	-100	2017/6/22	現状維持	
タイ	翌日物レポ金利	1.50	緩和: 2011/11/30	3.50	2015/3/11	-25	2017/7/5	現状維持	
ベトナム	リファイナンス金利	6.50	緩和: 2012/3/12	15.00	2014/3/17	-50	2014/12/23	現状維持	

(注) インドネシア中銀は2016年8月19日に政策金利をB1レートから7日物リバースレポレートに変更

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行